
IS(インフィニット・ストラトス)～願いと誓い～

灰色の廃人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS（願いと誓い）

【Nコード】

N6607U

【作者名】

灰色の廃人

【あらすじ】

少年は誓った。自分から全てを奪った者に復讐すると。

少年は願った。彼女と共に空を飛び続けると。

その2人が出会ったとき、物語の歯車が噛み合い、回りだす・・・。

ISの二次創作です。作者原作知らない上に文才ないです。気分とノリでやってるので不定期更新ですが、初心者なのでなるべく感想やアドバイスくれると大変うれしいですw

「物語の始まる前のプロローグ1」

「復讐を誓った少年」

IS、別名「インフィニット・ストラトス」。

篠ノ之^{しののたはね}束が開発したインフィニット・ストラトス（以後IS）は世界のパワーバランスを一変させ「女尊男卑」があたり前になってしまった。

開発当初は注目されなかったものの、束が起こした「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能を持つことが世界中に知れ渡る。宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移ってってしまった。

しかし、その変わってしまった世界で大切な物を失ってしまった少年がいた。

その少年は、この日で5歳の誕生日を迎えた。

平凡な家庭。厳しくも時折見せるやさしげな表情が印象的な父、穏やかでいつも自分にいたずらしてくる母、明るくて活発でなにより兄思いな妹。

プレゼントは妹が選んだ色違いの星型のペンダント。

別にたいしたものではないが、少年はうれしくてたまらなかった。

また、「この家族とずっと幸せな日々を送れるように」と願っていた。

た。

だがその幸せと願いは突然壊れた。

少年は夕方、母におつかいを頼まれ家を出ていた。その帰り道、突然人通りが激しくなった。当時、ISが世界に知れ渡り混乱していたのに少年が気づかなかったのは当然だろう。何故なら少年は、家族と過ごす方が幸せであり楽しかったからだ。しかし、運命は残酷にも少年から奪ってしまった。

家に着いた少年の目に映ったのは・・・、燃え上がる炎、焼けた大地、そして無残にも全壊した元我が家。

少年は現実を受け入れられなかった。普通ならば「家族はすでに逃げ出している」と考えるはずが考えられない。

なぜなら・・・目の前に妹の体だったものがあるからだ。

その体は服と共に焼け焦げており、赤くそまりきって生きている様子が見られなかった。

辺りを見渡せば、焼けた土の上にある母のような肉塊、崩れた家の下敷きにされ頭がない父。

そして上を見上げれば・・・真っ黒なフルスキン（全身鎧）のナニかが浮いていた。

そのナニかの手には銃のようなものがあり、それを逃げ惑う人々を的を撃つように殺している。

その時理解した。あれが殺したと、あれで家族を殺したのだと。的のように。

このときほど強い感情を覚えた日はなかった。その目に写る感情はまさしく憎悪。

その目で討つべき相手を見上げた。
いつか、いつか絶対殺してやると。この手でアレを同じ目にあわ
せると。

少年の手には色違いの妹のペンダントが握られていた。

く物語の始まる前のプロローグ1く（後書き）

感想・アドバイスありましたらおねがいします。

く物語の始まる前のプロローグく（前書き）

やる気あるうちに書いておきますw

「物語の始まる前のプロローグ」

「空を飛びたいと願った少年」

またそこにも大切な物を失った少年がいた。

そこは外から見れば小さな無人島。しかし、地下には膨大な広さを持つ研究所があった。

通路では白衣をきた研究員や整備士らしき人物があわただしく動き回っていた。

「実験の結果は？」

「予想以上ですね、基準値を大きく上回っています。」

「思考能力・状況判断能力・反射速度などの能力も常人とは思えない数値です。」

「今の訓練用の機体でもボロボロです。乗り手の速度に機体の処理が追いついていません。」

「ふむ、まだ耐久度が足りないか。新品か？」

「はい。第三世代まではいかないものの、第二世代の性能を大きく上回っています。」

「やはりか、あれへの搭乗を考えるべきか……。」

研究室では研究員や整備士がリーダーらしき男と話し合いをしていた。

その話のもとはいつと・・・

小さな小部屋が沢山ある通路、そのうちの一部屋にその少年はいた。

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ・・・。

部屋にはキーボードを叩く音がなく、ディスプレイに向かい合っている少年は無表情のままデータを見ていた。

「またデータ見てるの？よく飽きないわね。それに客に対して挨拶くらいしなさい。失礼でしょ。」

「君こそソックもなしに入室するのは失礼なんじゃないかい？」

いきなり部屋に入ってきた少女に少年は取り乱すことなく淡々と答えた。

「女は何しても許されるのよ。」

「そんな態度だから相手にされないんじゃない？」

「あなたがいるわ。いつも話してるじゃない。」

「話しかけられるからね。」

「なにそれ？話しかけられない限り話さないってこと？」

「そういつてるんだけど・・・。」

自分はそんなに話さない。苦手じゃないが面倒だ。こうしてパソコンで機体のデータ観覧やハッキング・OSの作成・基地の情報の観覧をしているほうがいい。

「そんなこと言ってるから友達少ないのよ。」

「君に言われる筋合いはないけど？」

「私はいいのよ。あなたがいるからね？」

「それって遠まわしに自分もいないって言ってるよね？」

「疑問に疑問で返さないでほしいわ。」

「それ自分の台詞。てか何しにきたの？」

そろそろ無駄な会話に思えてきたのでさっさと本題を聞くことにした。

「そうそう、あの動力炉を利用した機体が完成したのよ。」

「へえ、確か《GAT-X105ストライクガンダム》だっけ？」

「それと、《GAT-X103バスターガンダム》よ。」

「確かどっちもISとは違った原理で動いてるんだよね？」

「そうよ。まず動力炉が違う。そしてビーム兵器等の武装の追加。

そしてストライクガンダムは換装システムでバランス型、バスターは狙撃を主体とした遠距離火力特化型ね。」

ISとは根本的に違うのが《ガンダム》だ。

女尊男卑の世界で、男は権力を失ってしまった。だが、それに納得いかないものがあるのだ。

「この研究所、女の研究員なんて余程優秀な人以外はいないわよ。」

「哀れだな、ある意味。まあいても男の慰み者だろ。」

「あらら、その年にしてもう盛ってるの？ふふふ。」

「何トチ狂ったこと言ってたんだ。」

「なんだ〜、違うのか〜。ざんねん。」

「なんで嬉しそうに言ってたんだよ……。」

どうでもいいことだがこいつは女だ。しゃべり方でわかるがな。それと自分の口調が安定しないのもこいつのせいだ。

「それにしてもなぜこの2機だけが完成したんだ？」

「それは研究員にでも聞けば？あなたなら聞けるでしょ。」

「面倒だ。まあ予想できる。」

「へえ、流石ね。どんな理由かしら？」

「簡単だ。デュエルは特徴がない。ブリッツは変則的で火力がISに劣るかもしれない。イージスは乗り手の問題じゃないか？」

「ん〜、まあ納得かな。でも乗り手だれになるんだろう？色が灰色なのかね……。」

「VPS装甲で色変わるだろう、VP装甲より強化されてる上に動力炉のおかげでエネルギー切れの問題もない。」

「まあね。それにカッコいいし。」

確かに。フルスキン（全身鎧）っていうのがいいな。自分の趣味にあってる。

「ってそんなことじゃない。」

「あら、違ったの？じゃあ愛の語らいでも……。」

「そんなものはない。」

「即答しないでくれる？私でも傷つくのよ？」

「なら言っな。それよりいい加減本題を言え。」

「あら、やっぱり気づいてたのね？」

彼女は笑っていた。自分をからかったりする時ではない、心から

の笑みだ。滅多に見れないが。

「逃げましょう。」

「唐突だな。」

「物語はいつだって唐突なのよ。」

「いや、カッコいいこと言ってるつもりでもそこまでよくないから。」

「いいからいいから、まずこれを・・・。」

そう言ってまず渡されたのが・・・《ストライク》？しかも受け取った瞬間羽根のようなペンダントになって首にかかっていた。

「・・・なぜ？」

「逃げるためよ。ちなみに適正は最高値。」

「いつ測った。」

「寝てる間に、ちなみに体もね、ふふふ。」

怖いから聞かないことにした、てゆうか聞きたくない。まあひとまずこれは完成した《ストライク》らしい。

「あと《バスター》と動力炉はすでに逃走用に積んであるわ。この資料は全部あなたが持つてるからそのパソコンごと持っていくわ。あとは基地を爆破するだけよ。」

「用意すぎないか？」

「だって半年前から用意してたからね。」

「長すぎ・・・でもないか。ここだし。」

ここは外から見つからないようにかなりのカモフラがある。それ以外に出るのもかなり厳重な警備を抜けない限り不可能だ。

「さて行くわよ。」

「はあ、わかったよ。仕方ない。」

「あら、やけに素直ね？・・・まさか私に惚れたとか？！」

「いい加減ここに飽きたのとモグラみたいなのは生活はゴメンなだけだ。」

「なぐんだ、つまんない。」

不満そうに唇を尖らす彼女を見つつ準備を済ませる。

「行くわよ。一生私についてきなさい！」

「それ普通男が言うセリフ。」

いまいちしまらなかった。

結果的にいうと今現在脱出艇に乗り込んでいる。意外に気づかれな
いものだ。

「だって偽情報でまわりを操ったんだから。」

「道理で自分たちに見向きもしないわけだよ。」

大方モルモットの一部が盗み出して逃走したとでも流したんだろう。
そして自分達の部屋のカメラはハッキングでもして違うのでも流し

たんだろつか。

「ドンピシャね、全てあたってるわ。まさに以心伝心ね。」

「いいから行こう、何時気付かれるかわからない。」

「それもそうね。」

そういうとおもむろに操舵席に行き機器を操る。やがてシステムが起動し、エンジンが唸る。

（これで、自分は自由か。なんだか呆気ないな。まあ面倒じゃないからいいが・・・何かひっかかる。）

「発進するわよ。」

「りょうかい。ちなみに制御は？」

「あなたがしてよ、伊達に訓練してないでしょ。」

船の操舵なんてことしたことないのだが、あまり悠長なことは言ってられない。

さつき頭にひっかったものを振り払うように、自分達は研究所から脱走した。

「マズイな、かなりの数が来てる。」

「そうね、どうしましょうか？」

「こつちがどうしようだよ・・・。」

今現在進行形で追っかけられてます・・・研究所の訓練機にまあ訓練機でも《自分用》にチューニングされてるからかなり危険だ。

「どうしようか、流石に脱出艇じゃ速度も限度がある。それに近づくれたらアウトだ。」

「そうね・・・。」

彼女が考え込む。自分も考えているのだが・・・状況が最悪だ。脱出艇といっても小型な上に装甲もミサイル一発で墮ちる。その上武装がない、まあ脱出艇だから当たり前だが。要するに手詰まり、ゲームオーバー。

「私が囿になって惹きつけければあなたは逃げれるわよ？」

「そんなの駄目い決まってるッ!!」

思わず怒鳴ってしまう。しかし、それは考えていたことだ。彼女が脱出艇に残り、隙について自分がストライクで全速力で逃げればいけるのだ。

「そもそも逃げたいのはお前だろ？俺はお前に便乗しただけ・・・。」

「

「違うわ。」

一言で否定された。

「じゃあなんだよ。」

「あなたに自由になってほしいからよ。」

「・・・はっ？」

「あなた、いつも部屋に籠りっぱなしじゃない。まるで籠の鳥だわ。」

「それは君もだろう。」

「私はもういいのよ、廃棄処分だからね。」

それは流石に初耳だった。それとともに衝撃だった。なぜ彼女が廃棄なのだと？

「それにもう私がしたことはばれてる筈。もう引き下がれないの。」

確かに脱走したんだ、当たり前だ。

「それは自分もだろう？」

「いいえ、あなたは優秀だからもみ消されるわ。でも私は・・・。」

そういうと彼女は俯いてしまった。

「だから、せめて最後は好きな人に生きてほしいの。」

そう、泣きながら、滅多に見れない笑顔をうがべていた。気付いたときには彼女が抱きついてきていた。

「あなたといると、楽しくて安心できた。あなたは唯一私と対等に話してくれた。私はそんなあなただからこんなことするの。」

まったく理解できない、彼女はナニをイッテイルノダロウ？

「楽しかった、幸せだった。名残惜しいけど……んむう……ふぁ。」

何時の間にかキスされていた。それがキスなのかも何なのかもわからない。

「……ふう、最高ね。思ってたより極上だったわ。ふふふ、私の初めてよ、大切にしてくね……天音」

いつの間にか出入り口付近にいた自分は、彼女に押されて落ちた……艇から。

「ッ?!」

急激な浮遊感とともに感じる重力。どんどん離れていく脱出艇。そして自分と一緒に落ちてきたケース。彼女の儚げな笑顔、そして……脱出艇がビームに貫かれて爆発し彼女が笑いながら吹き飛ばす様子が目に写る。

く物語の始まる前のプロローグく（後書き）

なんか書いてたら楽しくなってこんなに書いてしまった。
感想・アドバイスお願いします。

設定解説へ1（前書き）

7 / 7 設定一部改変

7 / 1 7 設定一部改変

7 / 3 0 設定一部改変

8 / 2 設定一部改変及び追加

設定解説〈1〉

人物紹介（原作キャラ以外）

勿論主人公達は原作キャラと同じクラスです。

そらかわ
あまね
空川 天音

本作の1人目の主人公

当時 7歳

←

現在 15歳

身長 172cm

体重 55kg

誕生日 7月7日

血液型 AB型

容姿：少しクセのある髪を肩に

触れない程度に伸ばしている色は黒一色

目の色はスカイブルーで眠そうな感じ

体重のわりには筋肉があり、モヤシではない。

顔はぶつちやけるとガンダムSEED DESTINYのシン・ア

ス力似である。

声イメージ：シン・アスカ（鈴村 健一）

基本的に面倒くさがり屋だがやることはやる。

正直他人がどうなっても知らないが、必要な助けたりする。

常に睡眠用具とノートパソコンを持ち歩いている。極度の甘党。

過去に研究所でモルモット扱いされており、その時にミイナを失った

悲しみを感じて以来一定以上人と付き合うことをさけている。
感情を基本表にださずに話す、仲良くなった人には表情が出る。
リエルとは、街中で道を案内してもらった時に
天音がリエルの心の奥の闇に気付き、話をしたことが切片。
それ以来目的は違えど行動を共にしている。

あらゆる能力が常人を上回っており、研究所脱出以後
自分で機体の整備、武装の開発を行う。

学園に入るまでは基本的にリエルに動いてもらっていたので

ISを動かすことは研究所脱出時以降なかったため

機体は《ストライク》で待機状態は左腕に透き通るような白のプレス
レット。

IS適正値はSだがAということにしている。

リエル・シューリベル

本作2人目の主人公

当時5歳

←

現在16歳

身長181cm

体重72kg

誕生日 12月12日

血液型 B型

容姿：サラサラストレートの髪を背中にかかるくらいまで
伸ばしているがゴムで括っているため短く見える
色は黒みがかった茶髪

目の色はエメラルドグリーンで穏やかそうな感じ

基本的に引き締まっている肉体でホソマツチヨ

顔は10人中9人が振り返る程のイケメンで

簡単にいうとガンダム00のロックオン・ストラトスの顔

声イメージ：ロックオン・ストラトス（三木眞一郎）

読書と紅茶が好きで人に気遣いができる優しさをもつ

反面、心の奥底には家族を皆殺しにされた復讐心で溢れており、復讐するための力をくれた天音には感謝している。

自分では復讐が意味ないと思っけていてもそれでも、家族を殺した機体を討つと決めている

常に妹の形見のペンダントとおそろいの星型のペンダントを身に着けている。

射撃では天音でも勝てないほどの腕を持ち、リーダーシップがある。機体は《バスター》で待機状態は右手人差し指に填められたエメラルドの指輪。

IS適正値はSだが天音と同じくAとしている。

ミイナ

当時8歳 故

真っ白な髪を腰まで下ろしている。

顔は凛々しく切れ目で瞳の色はコバルトブルー

研究所で天音と一緒にモルモットにされていた少女。

天音以上に人嫌いで、天音意外とは話さなかった。

天音に恋心を抱くも、今の現状では不可能と感じ

天音には外に逃げてもらいために色々策を練り脱出する。

天音の心の強さ、そして力に溺れる事の無い精神に惹かれていたが

脱出艇で逃げる途中、天音に思いを告げて艇から落とした直後、艇をビームで貫かれ爆発に巻き込まれて死亡したと報告されている。

リン・シューリベル

当時4歳 故

兄と同じ髪の色
穢れのない真つ白な瞳

子供のころは兄は家で家族と過ごす日々を選んだため兄と多く遊んでいた。

いつも優しく時折しつかりした面がある兄を尊敬していた。当時から兄は子供とは思えないほど大人びていたが十分妹も大人びていた。

兄の誕生日、黒騎士事件に巻き込まれ、両親と共に死亡した。

まきはら きょうか
楨原 京香

現在 15歳

身長 158cm

体重 43kg

誕生日 6月19日

血液型 A型

容姿：緑色のウェーブがかかった髪を肩までおろしている
エメラルドグリーンの瞳に穏やかそうな感じ

小柄でよく年下扱いされる。運動神経はそこそこ。
I S 学園にオペレーターとして入学してきた1年生。
織斑一夏達と同じクラスに入る。
主人公達の発進する時のオペレーター。
よく舌を噛むドジっ娘。

機体解説

《G A T - X 1 0 5 ストライクガンダム》

W i k i 参照

違い

- ・動力がG Nドライブ
- ・V P S 装甲を使用されている
- ・脚部（人間でいう脛の後ろ）にスラスターが追加されている
- ・後ろ腰にはビームサーベルを2本収納し、武装を強化されている
- ・さらに両腰のコンバットナイフを収納しているのを取り外しでき、ストライカーパックにあわせて変えることができる

武装

- ・コンバットナイフ×2 取り外し可能
- ・ビームサーベル×2 後ろ腰
- ・頭部バルカンイーゲルシエル×2
- ・対アンチビームシールド×1 左腕装備
- ・57mm高エネルギービームライフル×1 後ろ腰（ビームサーベルの下）

ワンオフ・アビリティー（単一仕様能力）
未だ発現していない

《ストライカーパック》

VPS装甲のため、各パックごとに機体色が異なる

- ・エールストライカー 変化なし
- ・ソードストライカー 彩度の低い青
- ・ランチャーストライカー 青の部分が緑になる。

《オリジナルストライカーパック》

・セブンソードストライカー エールストライカーと同じ機体色
文字通り足りない5本の剣を装備し、セブンソードとする
換装時には腰のアーマーシュナイダーを収納する
ホルスターがパージする。

ぶつちやけエクシアのセブンソード

- ・GNソード×1 右手装着
- ・GNロングブレイド×1 右腰
- ・GNショートブレイド×1 左腰
- ・GNビームブーメラン×2
- ・ソードシルエットと同じような形でバックパックに装備される
- ・GNシールド×1 左腕装着
- ・接近戦闘支援情報制御システム搭載スラスタ―
背部に換装される

・スナイパーストライカー ガンダムデユナメスと同じ機体配色
遠距離狙撃用の装備を備えたストライカーパック
ぶつちやけデユナメスの装備だが少し違う

- ・GNスナイパーライフル×1
- ・GNフルシールド×2 両肩
- ・クスイフィアス・レール砲×2 両腰
- ・姿勢制御背部スラスタ― バックパック
- ・GNビームピストル レール砲の付け根あたりマウントされる
- ・狙撃用バイザー バックパックと繋がるように顔を覆い尽くす

《GAT-X103バスターガンダム》

Wiki参照

違い

- ・動力がGNドライブ
- ・VPS装甲が使用されている
- ・肩部のミサイルポッドを取り外し可能になっているためGNフルシールドへの換装可能
- ・両腰のスペースにレール砲が2門つけられる
- ・脚部にストライク同様スラスタ―がつけられている
- ・さらに胸部にも肩部と同じミサイルポッドが追加され、膝部のGNコンデンサーを
- 取り除きミサイルポッドを積んでいる
- ・頭部ガンカメラが追加されカバ―開閉式となっている
- ・脚部の脹脛部分にはホルスタ―が設置され、GNビームピストルが各2丁
- 収納されている
- ・さらに、本来装備されないビームサーベルを後ろ腰に2本装備されている

武装

・ 220mm GNミサイルポッド×3 両肩部・胸部 スモーク弾
発射可能

・ GNマイクロミサイルポッド×2 両膝部 スモーク弾発射可能

・ 350mmガンランチャー

・ 94mm高エネルギー収束火線ライフル

・ クスイファイアス レール砲×2 両腰

・ GNビームピストル×2 両脚部のホルスター内

(砲連結時)

・ 対装甲散弾砲

・ 超高インパルス長射程狙撃ライフル

(換装時)

・ GNフルシールド

ワンオフ・アビリティー(単一仕様能力)

高高度狙撃銃 - 高高度狙撃用大型ビーム砲

使用時に巨大な狙撃用ビーム砲が出現し、スコープを頭部ガンカメラに直結。

大型GNコンデンサーにGN粒子をチャージし、高濃度圧縮・加速させることで

驚異的な射程距離と威力を発揮する。

その他説明

《黒騎士事件》

白騎士事件後起きたなぞの事件。目撃者がほとんどおらず、生存者も公共の場では居ないとされていたが、リエル・シュリーベルが奇跡的に生き残っていたが、

死者約1万人を超える事件となった。

なお、事件名の由来が

「黒い装甲を纏っているISのようなもの。」
という数少ない目撃情報から得られたもの。

《GNドライブ》

ISのコアの代わりにしようされる動力炉。

半永久的にエネルギーを生み出す。

VPS装甲を使用しているため、エネルギーを消費していくと
粒子供給が足りずPSダウンを起こす危険性がある。

研究所には6基あったが、現在天音は5基所持しており、
残りの1基は不明。

現在はトランザムシステムもあるが、まだまだシステムの
調整が必要であるため発動は不可能である。

本作では、GN粒子を電力に変換し、GNと名のつく装備以外も
使用可能にしている。

《研究所》

かつて、天音とミイナが過ごした、

「ISに対抗するために新たな兵器開発、操縦者育成」
を目的とする研究施設。

だが実態は、能力の向上に見込みのもてないもの・反乱分子や
脱走者を廃棄処分し、モルモット達には研究所に来る前の記憶を完
全に消す

違法研究所である。

天音の脱走後も研究がすすめられているが、脱走者が現れたために
研究所を

移動し、現在行方知らずである。

天音達は情報を見つけては研究所を潰しているが、全てが末端だっ
たため

有力な情報がなかなか手に入らないでいる。

設定解説へ1（後書き）

誤字脱字、他設定に関する質問があればよろしくおねがいます。

～プロローグ～（前書き）

学園入学直前です。

プロローグ

SIDEリエル

あれから10年、俺はあるやつと共に行動している。

そらかわ
空川 あまね
天音。

いきなり俺の心を見抜いた男であり、俺に復讐するための力をくれたやつだ。

「おお、リリエル………!!」

「ん？どうかしたか？」

「頼みたいことがあるけどいいか？」

「まあ内容にもよるが……、いいだろう。」

「おお、さっすがリエル！んじゃ早速……。」

そついうとパソコンで地図を見せられた。

「このポイントの調査をしてくれ。」

「またか？いつものことだから別に構わないが……。」

天音の頼みは簡単だ。

このあるポイントへ行つてあれ（……）があるか調査してくれ、という。

たまにこんな頼みがあるんだがな……。

「お前は行かないのか？」

「俺はいいのさ。こうしてデータ処理とか機体整備に忙しい。それに船の設計やら開発で忙しいし。」

「それは、まあそうだが・・・。」

「それに！少しでもそれに慣れていたほうがいいだろう？」

確かに。

俺のバスターは今待機状態で首にかかっているペンダントタイプだ。3つのうち、銃の形にほってあるのがバスターの待機状態のやつだ。

「んじゃよろしくな。」

「ああ、りょーかいした。」

ちなみにこいつはあまり動かしていないせいか、まだ一次移行していない。

本人曰く、

「こういうのは、後々のためにとっておくのさ。それに今は動いてくれるやつがいるし。」

と言っていた。いつも思うがこいつの考えることはわからん。

そんなこともあつてか、月日は流れて俺達は・・・。

「IS学園」に入学する。

互いに現在15歳、一般的には高校に入学だろう。

だがな・・・

「・・・何故IS学園なんだ？どうやって手続きとったんだ？」

「ここならいい隠れ場所になると思って菜。手続きは顔見知りに頼んだのさ、条件付だけど。」

「ん、条件？金か？」

「いんや、ある人物の保護を会った時頼まれた。ついでに鍛えてくれと。」

「ある人物？まさかあの・・・。」

「そう。そいつの姉に頼まれてな。まあ悪くない条件だ。」

「まあそうだが・・・いいのか？」

「俺達は目的がある。少しでも戦力は多いほうがいい。それに色々

(・・・)あるだろう？」

「はははっ、違ういな。」

まさか会えるとはな・・・・・・・・

おりむら いちか
織斑一夏、織斑千冬。

世界で初めてISを起動させた男とブリュンヒルデに会えるとは・・・。

流石に思っ てなかったぞ天音。

ゝプロローグゝ（後書き）

更新です。

次にようやくISS学園にきます。

誤字脱字・アドバイスあればお願いします。

ゝIS学園ゝ（前書き）

連続投稿です。

「IS学園」

SIDE天音

今日から「IS学園」に通うことになりました。
自分と隣を歩いてるリエルはちゃんと指定されている制服を着ている。

「本当に来れるとは……。」

「なんだ、嘘だとも思ったのか？」

「いんや、信じていたさ。だがな、実感なくてよお……。」

「気にするなつて。周りから見れば自分達は高校生さ。とびきりスキャンダル持ちの。」

「最後のは余計だ……。」

まああの織斑一夏以外にもまだ2人いたんだからな。大ニュースになるくらい予想がつく。

「だが、それくらいの価値があるのだろうか？」

「ああ、勿論さ。でなきゃここには来ないしな。」

俺達はそれぞれ目的がある。そのために、ここに来る事は必須事項だった。

そのために、国籍やら戸籍やらを偽装したのは言っまでもない。

「まあとりあえず行くか、初日から遅れるのは流石にマズイだろ。」
「ああ、行くぞ天音！」

そう言っ て俺達はIS学園に向かつて行っ た。

後ろから見て いる者に気付かずに・・・。

SIED 京香

「・・・今行っ た人、IS学園に入るのかな？」

そう呟いたのは、まきはいつか 槇原京香。

IS適正はBながらも、本人はオペレーターを志望している。
その背の低さと態度からはとても15歳には見えないのだが。

「織斑君・・・じゃないよね。」

織斑君とは織斑一夏のことだろう。

「織斑君以外の男の人か、ちょっとドキドキするな／＼／＼。」

そう言っ た彼女の頬は赤くなっ ていた。

だが、彼らとの出会いが彼女の運命を変え るとは、この時まっ たく
予想できなかつ ただろう。

SIDE天音

自分は現在1 - 1の教室で副担任の山田真耶やまだまやの話を聞き流している。

千冬さんは来ないのかな、リエルもあのブリュンヒルデとは会ってみたいらしいし。まあ本人はそう呼ばれるのが嫌らしいから後でリエルに教えなければマズイ、主に頭への心配だが。ちなみにリエルは右隣だ、これはこれで便利だと感じる。織斑と若干近いが、てか目の前だ。

そんなことより女子が多いな、まあISは女子しか使えないから仕方ないが……。それに視線をやっぱり感じる。今は織斑の自己紹介中だから少ないが、それでもやはり感じる。

「……以上です。」

つとお、考え込んでたうちに終わってしまった。しかも女子が全員ずっこけたのを見ると期待させておいて結局何も言わなかったな。・
・それと、リエル笑うな。変に注目されるだろう。

「え、え？みんなどうし……ってイダッ?！」

目の前で悶絶してる一夏。その隣には・・・千冬さん？まさか担任なのか？

「・・・織斑、お前は挨拶もまともにできんのか？」

「ち、千冬姉？！なんでここに・・・。」

ガスッ！っという効果音とともに頭に叩き込まれる出席簿。痛そうだな、リエルは苦笑いだし。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。これから一年間で君達を使い物にするのが私の仕事だ。だから私の話はよく聞き、よく理解しろ。いいな。」

おお、流石元教官。あの年でこれほどの威厳を発することなんて普通は出来ないだろうに。鋭い目、纏った雰囲気などは初めて会った時とまったく変わらない。

その時にクラス中からあがった黄色い声は割愛しておく。本人疲れたようにため息はいてるし。

「静かにしろ、いつまで騒いでいる！まだSHR中だぞ。自己紹介を続けんか。」

そう言い放つと静かになる教室。そして織斑から続いていって・・・
・・・俺の番だ。

「はじめまして、空川天音です。苗字は空に川、名前は天使の天に音で空川天音です。一応織斑君同様にISを動かせる男子です。趣味は寝ることです、よろしくお願いします（ニコッ）。」

最後に軽く笑顔をこめてみた。ふざけ半分であるが……

「……………キャア……………!!」「……………」

「イケメン男子パート2!!」

「美形でヤンチャ系よ……………!!」

「私の膝の上で寝て……………!!」

「むしろ一緒にベッドで交わって……………!!」

凄まじいことになった。しかも最後のやつ、お前は欲求不満か？リエル、苦笑いしながら俺を責めるような目で見るな。悪気はなかったんだ。

千冬先生……といったら出席簿を落とされた。織斑先生の一喝で静かになり、次はリエルの番だ。

「名前はリエル・シューリベル。俺もこいつらと同じでISを起動させた男だ。趣味は読書に好物は紅茶のオールグレイ。天音とは仲がいいぜ。これからよろしく!」

と最後はいつもの笑みを浮かべていた。お前も俺のことが言えないだろ……。すると予想通り。

「……………キャア……………!!」「……………」

「イケメン男子パート3!!」

「しかも大人の美形でクール……………!!」

「シューリベル様……………!!私と午後の紅茶を嗜みましょう……………!!」

「私の王子様……………私を攫って……………!!」

ほらみる。いまさら頭抱えるな。てか2連発は耳が痛いな……。

リエルは自分のしたことに後悔気味だが、自業自得だ。

その後は普通に進行した（途中熱が入ったように女尊男卑を語るやつがいたが割愛）。

「これでSHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。そのあとは実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか？ いいのなら返事をしろ、よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。以上だ。」

長かったなSHR、てか疲れた。すると目の前の織斑がこっち向いてきた。

「よお。空川だよな？俺は織斑一夏。同じ男同士、よろしくな！」

「ああ、よろしく。それと自分のことは天音でいいよ。」

「そうか、じゃあ俺のことは一夏でいいぜ！………ところで隣のそいつはシューリベルだっけ？」

「ああ、俺のこともリエルって呼んでくれても構わないぞ？」

「んじゃ遠慮なく、リエルよろしくな！」

「こっちこそよろしく、一夏。」

そういうと握手する。勿論俺もだ。てか仲良くなるの早いな、まあいいことだけど……。

その後は自分の軽い趣味やら雑談やらをしていたのだが……。

まあ一番驚いてたのはリエルが俺らと同年つてところだな、俺も信じられん。なぜあんなに大人びて見えるんだ？

「ちょっといいだろうか？」

すると話の最中に話しかけてきた女子がいた。

確か彼女は、篠ノ之^{しののけ}箒。一夏の幼馴染だったかな。

「ん、箒か。どうかしたか？」

「空川、シューリベル。すまない、一夏を借りても……」

「ああ、構わないよ。聞いたけど一夏の幼馴染でしょ？色々話すことはあるし、つれていきなよ。いいだろ、リエル？」

「俺は構わないぜ、一夏にだってそういう話はあるだろうし。」

「2人ともすまない、感謝する。」

そう言つて箒は一夏を連れて教室を出て行った。

それにしても、

（あれが織斑一夏に篠ノ之箒、少なくとも一夏はISの経験が少なすぎる。篠ノ之は剣術が出来るそうだが……、精神的にムラがあるな、どっちもだけど……。まあそれも含めて後々育てるしかないか。）

と考えつつ次の授業まで寝ることにしたのだ。

～ISS学園～（後書き）

誤字脱字・アドバイスあればよろしくおねがいします。

7 / 8 文章改変

7 / 30 誤字及び文章修正

く波乱万丈く

SIDE ALL

入学後初めての授業は、山田先生によるISの基礎知識だった。

「はい、ここまででわからない人いますか？」

大体の基礎知識となつているところまで進んでいた山田先生は質問があるかどうか確認した。すると多数上がっていたのだが、中には「男で始めてISを動かした」一夏がいた。

「はい、織斑君？なんでしょう？」

「え、えつと・・・その・・・ですね・・・」

「はい？」

「殆ど解かりません・・・」

「・・・え？」

あまりの衝撃に山田先生は一瞬止まってしまった。

IS学園には、入学される時に配布される参考資料がある。それを読んでいれば、最低でも基礎中の基礎くらいは覚えているはずなのである。

「ほ、ほとんど?! 全くこれっぽっちもですか?!」

「は、はい。全くこれっぽっちも・・・」

「・・・織斑。」

一夏を呼んだ千冬表情はいつになく険しい。

「入学前に配布された参考資料はどうした？」

「え？あれなら……。電話帳と間違えて捨てた。」

ゴスツッ！！

一夏が言った瞬間、千冬が持っていた出席簿の角が頭に落ちた。音が音だけに、痛みが激しく一夏は頭を抱えて悶絶した。

「馬鹿者、あれは必読と言っていただろう！後で再発行してもらうから、一週間後までに全て覚えろ。」

「いや、全部はさすがに……………」

「……………やらないのか？」

「……………いえ、やらせて頂きます。」

千冬の威圧に耐えられなくなった一夏は、泣く泣く了承するしかなかった。

「天音、後でこの馬鹿に基礎を叩き込んでおけ。男同士だからといって甘やかすなよ？」

「わかっています、きっちり教え込む（叩き込む）ので。」

天音のスパルタを受けることになった一夏（教師公認）。

「それと空川、話がある。放課後生徒指導室に来るように。」

「はい、わかりました。それとリエルは同席しますか？」

「いや、お前一人でもいい。シューリベルは先に寮へ帰ってもかまわん。もう何もないか？」

「はい、ありません。では放課後に・・・。」

そして、千冬は天音と放課後1対1（マンツーマン）で話をすることになった。

SIDE 天音

「わりいな、天音。迷惑かけちまって・・・。」

「気にするなつて一夏。教えることは勉強にもなるし。」

「そうそう。それにな、こう見えて天音は頭いいぜ？」

「マジでか?!はあ、顔に合わないな。」

「ハハハ、そんなに頭悪そうに見えるのかな？」

「・・・天音悪かったからペンを喉に突きつけなくてくれ、怖いから。」

授業終わって一夏とリエルとで話していた。だが馬鹿にされたので少し仕返しをする。まったく、これでも頭はいいのに・・・。

「ちょっとよろしくて？」

「ふわ、めっさ眠い。一夏リエル、この学校でいい昼寝スポット見つけたんだけどさ、一緒にいかな？」

「マジか?さつすが、情報早いなあ。」

「いや、さっき女子捕まえて聞いただけだ。」

「まずその前になぜ昼寝スポット？」

「おまつ、一夏。昼寝は最高だろ？」

「ちよつと！いい加減に無視しないでくださります？！」

「あ？誰ですかあんだ。」

するとそこに割り込んでくる女子がいた。話しかけてきたのは、見た目は金髪の長髪に西洋な感じ漂う少女だった。若干怒りが見られるのは無視され続けたからだろう。

「まあ？！なんですよそのお返事！それに話しかけたのにもかかわらず、無視するだなんて！私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度があるのではないかしら？」

「悪いけど、自分興味ないんで。」

「てか俺君んおこと知らないし。」

「自己紹介聞いてなかったのか一夏？名前はパセリー・オセロット。イギリス出身のな。」

「あゝ、悪い……。自分のことではいいっぱいで聞いてなかったな。それで、そのオルコットさんが俺に何か用？」

出会ったときの態度が悪いからか、若干ふてぶてしさが混ざっている。しかもリエルにいたっては堂々と本人の前で名前を間違えている。

「パ、私の名前はセシリア・オルコットですわ！！それに私を知らないだなんて……。この代表候補生にして入試主席の、このセシリア・オルコットを？！」

「うん、知らない。」

「言わなくてもよくねえか？それより代表候補生って何？」

「そこも知らないのか一夏？！まあ簡単にいうと国家代表IS操縦者の候補生さ。」

「へえ、それってすごいのか？」

「代表候補生は簡単には選ばれない。人数に限りがあるし、IS適正レベル、教養、技術、それぞれが優れていなければ代表候補生になれない。更に代表候補生には国家や企業から専用機、まあ専用のISが支給されるくらいだな。」

「そう！つまりエリートなのですわ！！！」

なんか激しく自分を褒めてる……。見てて哀れだな。

「そのエリートの私と同じクラスになりましたあなた達は非常に運がいいでしょう！その幸運を喜んでいただきたいですわね。」

「へえ、そりや光栄だねい。」

「おお、光栄光栄。」

「はあ……。眠い。」

「馬鹿にしていらつしやるの？それと貴方！話してる途中で眠るのは失礼ですわよ！！！」

「……………zzzz。」

「話を聞きなさーい！！！」

リエルと一夏の棒読みのセリフと、天音の態度で完全に怒り心頭のセシリアは睨みつけていた……。主に天音を。

「だいたい、何も知らないくせによくこの学園に入学してこれましたわね。男性で初のIS操縦者と言うから少しは期待していたというのに……。シューリベルさんはそれなりの知識はあるご様子ですが、空川さんと織斑さんは期待外れですわね。」

明らかに馬鹿にしている態度だった。天音が一夏と同じなのは、セシリアに対する態度であろう。しかし、一夏が入学した理由と知識はまったく別である。

「まあでも、私は優秀ですから。織斑さん達の様な方にでもも優しくしますわよ？ 解らない事があれば・・・まあ、泣いて頼まれれば教えて差し上げても宜しくつてよ？ シューリベルさんも流石にエリートである私ほどの知識は御座いませんでしょうしね・・・。何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから。」
「あれ？ 俺も倒したぞ教官。」
「自分も倒したな。」
「俺も倒したぜ。」

リエルは相手を近づけさせない、いつもどおりの戦いで圧勝。天音は未だに《ストライク》が一次移行していなかったが、アーマーシュナイダーとイーゲルシエルだけで倒した。

「ハアツ?!」

「一夏は倒したというより・・・、あれは教官の自爆だと思うぞ。」

「だよな、流石に全速力で壁に激突したの見たときはあせったぜ・・・。」

「私だけと聞きましたが・・・。」

「女子の中ではって話じゃないか？」

《キーンコーンカーンコーン》

どうやら休み時間は終わりだそうだ。

「ッ?!は、話の続きはまた改めてですわ!宜しいですわね?!」

そう宣言したセシリアは自分の席へと戻っていった・・・。

時間は過ぎて放課後。

「よし、んじゃちと織斑先生のところ行くわ。」

「ああ、そうか。んじゃ俺は先に寮もどってるわ。またあとでな。」

「ああ、一夏じゃーな。」

「おう、また明日な！」

そういうと俺は教室を出て生徒指導室に向かう。ちなみに学園内のあらゆる場所は覚えた。必要になるかは知らないが。

「つとと、ここか。んじゃ・・・《コンコン》失礼します。織斑先生はいらっしゃいますか？」

『来たか空川、入れ。』

そう言っただけに入ると、長テーブルに書棚、ソファが2つある。そのうちの1つに千冬さんは座っていた。

「まあ、まず座れ。」

「あ、はい。失礼します。」

「呼び出してすまない。それで話なんだが、いいか？」

「ええ、構いませんよ。」

（まあ話なんてわかってるんだけどね。）

「まず、寮のことだ。お前の部屋は一夏の前だ。」

「成る程。守るべき相手は近くに居たほうがいいですからね。」

「ああ、それもある。それと、学園の数少ない男子だ。一夏と仲良くしてほしい。」

「それは勿論ですよ。あいつとは会ったばかりですが、いいやつってことはわかってますから。」

「そうか、すまない。」

「なんで謝るんですか。当然のことでしょ？それと、一夏の部屋の隠し物はリエルに頼みましたんで大丈夫かと。」

「そうか、しかしいいのか？」

「何言ってるのですか？自分も少なからずISが使えます。なので一夏と同様のことをされてる危険があります。まあリエルが全て処分しますが。」

何気にそういうことが上手くなってきているリエルである。それも前の任務で身に着けた技術だろう。

「・・・何から何まですまない。」

「構いませんよ、もとよりそういう条件でしょう？」

「ああ、『一夏の安全を護り、必要な力を身につける。』だったな？」

「ええ、約束は守りますよ。それくらいのことをあなたたち（・・・）はしてくれた。これは一種のギブアンドテイクです。」

「ああ、そうだな・・・。」

「絶対とはいいません。言いたいですけど・・・ですが、自分達は出来る限りのことを最大限に活用して一夏達を護りましょう。」

「そうか・・・。一夏のことは頼む。」

「・・・ハッ！あまりに真剣な態度に見惚れてしまった。やっぱり心配だろうな。」

「・・・わかりました。」

短い言葉だが、ここは気持ちを込めた。薄っぺらい言葉で飾るより、こういう直線的なほうストレートが伝わるからな。

「そうか、ならいい。困ったことがあれば何でもいいから協力させてくれ。」

「はい。それと、自分達のISの事ですが・・・。」

「それとに関してだが、こちらで勝手に捏造させてもらった。」

「ニュースで見ましたよ。あの『篠ノ野博士が作り出した新たなIS?！』って記事には驚きましたが。」

「勝手なことをしてすまん。」

「いえいえ、むしろ感謝しますよ。自分で作ったとは言えませんか。」

「作ったとはおもしろい冗談だな。」

冗談じゃないんだがな、半分くらいは。

「ふつ、まあ仲がいいからといって余り騒ぐなよ？まわりは女子なんだからな。」

「わかっていますよ、それでは自分は帰りますね。」

「そうか、度々呼び出してすまなかった。」

「いえいえ、では失礼しました。」

ボタン。

そうやって俺は外にでる。

「……………真剣だったな。やはり家族を大切なんだろう、自分

にはわからないが。リエルにはわかるかな？・・・いや、あいつはもう（・・・）いないんだ。

・・・まあ取り合えず寮に帰って寝よう。

SIDE 千冬

「いえいえ、では失礼しました。」

ボタン。

・・・出て行ったか。

「やっと終わったの？ちーちゃん。」

「束・・・、ずっと隠れていたのか？」

「もち！」

今現れたのは、《篠ノ之束^{しののめむね}》。ISを開発し、空川達をここに
いれた張本人だ。

「それにしてもちーちゃん。信じるの？」

「なんだ束、不服か？」

「ちーちゃんが護ればいいじゃない。ちーちゃんは強いよ。」

「あいつらも強いさ。私を前にして全く動じてない。それに、味方は多いほうがいいだろう?」

そつだ。私を前にして動じなかったのだ。未だ二十歳を越えていない子供が、だ。

「そうそう、面白い情報が手に入ったよ。2人の過去!」

「・・・そんなことしてもいいのか?」

「ばれなきゃヘーキ!それに向こうも調べてるだろうし。」

「そうだろうな。」

それくらい当然だな。

それで2人の情報だが・・・。

「断片的過ぎる。」

「これしか出てこなかったんだよ?!しかも明らかに偽装だし!!」

「確かに・・・。」

一見普通の戸籍だ。しかし・・・。

「IS^{（注）}学園に入ることであいつらに得られるものは・・・。」

「やつぱり・・・、過去かな?」

「それしかないだろう。」

しかし、その過去が出てこないのだ。

「詮索するのめんど、あつちから話してくるのを待つ?」

「それしか方法がないだろう。それと束、色々してもらって助かった。」

「いいよいいよ、他でもないちーちゃんの頼みだから！」

「そうか。」

「んじゃ束ちゃんは帰ります！あ、いつくんのISはもうすぐ届くから。んじゃ！」

「ああ……。」

すると束は人参？ロケットでどこかへ行つた。……もついい。

それにしても……、あいつらの過去は想像できないことがわかる。束が本気で調べても断片的であり、不十分だった。余程のことだろう。それとシューリベルと天音とは何かが（……）違う。だがそれが何かがわからない。

「向こうが話してくれるのを待つか……。何時になるのかわからないが。」

その時は刻一刻と迫っていた。

く波乱万丈く（後書き）

誤字脱字・感想お願いします。

7 / 3 0 一部変更

くクラス対抗戦代表者選抜く（前書き）

セシリアと天音に決闘フラグが立ちます。

一夏とリエルにも決闘フラグが立ちます。

くクラス対抗戦代表者選抜く

SIDE 天音

学園2日目の朝。

なんだが……。ヤバい。余り朝日の清々しさに死にそうだな
ぜリエルは平気なんだろう……。

「早く飯食え、遅れるぞ。」

「……。わかってるよ。」

ちなみに俺らは学生寮の食堂に来ていた。

国から資金が出ているIS学園の学生寮内食堂というだけあって、
かなり上質なものが取り揃えられている。

まあ自分はベーコンエッグトースト2枚にアイスココアというモ
ーニング。リエルは焼き魚定食に牛丼だ……。凄まじく似合
わないし何故2つ？まあ足りないからだろうが……。

「あれ？天音にリエルじゃん！」

「ん？一夏に篠ノ野か……。」

「ところでなんで天音はこんなに眠そうなんだ？」

「気にするな、こいつは朝に弱いんだ。正しくは朝日に、だが。」

「・・・うるさい。」

食堂に来た一夏達は、俺達のいるテーブルの席に座った。

「あ、2人には紹介してなかったな。紹介するぜ、俺の幼馴染の篠ノ之箒だ。箒、こっちの2人、右の眠そうなのが天音、左のシャキッとしたのがリエルだ。」

「よろしく、篠ノ野さん・・・。」

「よろしく、篠ノ野！」

「あ、ああ。よろしく。それと別に箒で構わない。」

「そうか？じゃあ箒、よろしくな！」

そう言うてにこやかに握手をするリエル。たらしが（ボソッ

それにしても・・・、これが篠ノ野の妹、箒か。

「それより、天音はそれしか食わなくて平気なのか？」

「俺は朝あんまり食わないんだよ・・・。それでも食べてるほうだ。」

「天音は小食なんだよ。」

「そついうリエルはめっちゃ食うな。」

「これでも少ないほうなんだがな。俺はガッツリ行くほうなんでね。」

それで少ないとか胃がおかしいとは思えない・・・。

そうこうしてる間に飯が食い終わった。リエルは既に終わっていた。・・・こいつはやっぱりおかしい。

「一夏、あんまりのんびりしてると箒共々遅刻だぞ？」

「うあ？！ま、マジかよ！！！」

箒は食べ終わってるしな。一夏、焦って食わなくても先には行かないからな。

すると、千冬さんが入ってきた。あれ？寮長だったっけ？覚えてないわ。

「何時まで食べているつもりだ！食事は迅速にとれ！時間は待ってはくれんぞ！」

・・・何故みんな朝からあんなに元気なんだろう？疑問で仕方ない・・・。

「食い終わったことだし、さっさと片付けて行くか。」

「オーライ。遅れて出席簿はやだしな。」

「おう！箒、行くぞ。」

「わ、わかった。」

全員食べ終わったのでトレーを片付けてすぐさま教室へ向かう。

だがな、一夏。別に急ぐからって箒の手は握らなくてもいいぞ？真っ赤じゃないか。

所変わって教室。

朝のHRが始まった。今日は、会議がないらしく織斑先生だ。

「これより、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める！」

クラス代表者とは、対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会の出席などの、まあクラス長と考えて良い。自薦他薦問わない、誰かいないか？」

やだな、俺はそういう面倒ごととはうけたくないし。まあ誰も俺をあげるなんて・・・。

「はい。織斑君を推薦します。」

「あ、はいはい。私も織斑君がいいと思います。」

「私は空川君を推薦いたします！」

「空川君にいつぴょー！！！」

「シユーリベルさんがいいと思います！」

「シユーリベル様に決まってますわ！！！」

・・・なんて思っていた時期がありました。自分・リエル・一夏が推薦されたが・・・、なんかリエルは女子ファンが多い気がする。まああいつはイケメンだからな。

なんて考えてたら、千冬さんがこっちを見ていた。・・・ああ、一夏の護衛とかか。一応『安心してください。』とジェスチャーで伝えておく。

しかし、それに不満がある生徒もいるわけで・・・

「納得いきませんわ！！！」

バンッ！

机を叩いて立ち上がったのは、セシリア・オルコットだ。いらない口を挟みこんできやがって・・・、いや、むしろ面倒事を押し付けられるんじゃないか？

「そのような選出は認められません！ 男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか！？」

「どーでもいいから早くしてくんないかな。眠いんだけど・・・。リエルは女子と喋ってるしさ、後で殴る。」

「だいたい！文化としても後進的な国に住まなければいけないこと事態、耐え難い苦痛でありますのにつ・・・！！」

「イギリスだつてたいした国じゃないっつーの。それに飯も不味いし、良い所なんてないじゃん。」

「あつ、貴方？！私の祖国を侮辱しますの？！」

「あ、つい思ってたこと言っちゃったせいで俺に矛先向いちゃったよ・・・。」

「つーかさ、先に日本のこと侮辱してきたのはそっちだろう？そもそも、その女尊男卑の社会を表現した態度！人を見下した目！さらに日本の文化がたいしたことがない？！イギリスだつて大して進んでないだろ！」

「なっ？！そ、そこまで言うのなら決闘ですわ！！」

「ハッ！！小娘が、たかが候補生くらいでいい気になるなよ？」

「・・・ヤベ、イライラからつい決闘うけちゃった。反省もしていないし後悔もしてないが。しかも口調まで変になってる。戻さないと・・・。」

「態と負けたりしましたら私の駒扱い・・・いえ、奴隷にしますわよ？！」

「そんなことはいいです、ハンデはどのくらいつけますか？」

「いいんですよ、既にいらないうってますし。自分もハンデなんて付けてもらってもしあっちが『ハンデのせいで負けた』なんて言われたくないし。」

「貴方、私を馬鹿にしているの?!」

五月蠅い、あんまり騒がないで欲しい。こっちは朝から眠い上に今の騒動でイライラしてるんだ。

「話は纏まった様だな。それでは勝負は来週の月曜、第3アリーナで行う。それと、織斑とシュリーベル。貴様らも推薦されたんだ、勝負しろ！異論は認めん。」

「なっ?!ちふ・・・織斑先生、なんで俺とリエルまで?!」

「なら俺と一夏、天音とオルコットで両方の勝者が試合して勝ったほうが代表ってことで。」

「リエル?!」

「だそうだ。各自、準備をしておくように。」

千冬さんがそう締めくくって授業は終わった。

マジだりい。その場のノリと気分で決めるものじゃないな・・・、はあ~~~~。

今日の授業は全て終わって放課後、自分は一夏達を連れて千冬さんの所に来ていた。

「織斑、お前には学園側が専用機を用意することになった。」

「え？専用機って確か・・・、代表候補生とかしか持つことが出来ないんじゃないっけ？」

「大体あつてゐるな。勉強のたまものか？」

「先生がいいからさ。」

一夏は、時間が余っていれば天音達の部屋に来て勉強するようになっていた。初めて来たときは、天音の持っている本・寝具・パソコンに驚かされたが・・・。その時には、天音カリエルが一夏達に教えていたのだ。

「そのISのことだが、届くのはちょうど決闘の日だ。まあ先に空川とオルコットが試合をするから、お前はその間に初期化と最適化フォーマット
フィッティングをしてもらう。」

「えっと・・・、」

「要約すると、俺らが試合してる間に調整しろ！ってこと。」

「成る程、サンキュー天音！」

とうとう『一夏専用のIS』が見られるのか。少しだが興奮しているのが自分でもわかる。

（けどやっぱり面倒だな、辞退したい・・・。）

やる気が籠っていないのだった。

「そういえば天音はISあるのか？」

「あるぞ？まだ初期化と最適化終わってないけど。」
フォーマット フィットینگ

「マジか？！どうすんだよ！」

「いいよこのままで、試合中に終わらず。」

朝のメンバーで昼食をとっていた。話の内容は勿論決闘である。

「それより一夏はどうするんだ？ISはいいけど訓練とか？」

「うわっ、考えてみればまだ届いてないから訓練出来ねえじゃん。
しかも相手はリエルだしよ！」

「ハハハ。まあ気軽にやろうぜ一夏！」

「・・・その気楽さが腹立つ。」

天音は今のリエルの気楽さに腹がたっていた。

「じゃなくて、一夏の訓練！学園の訓練機も打鉄やらラファール・
リヴァイヴがあるけどさ・・・、一年のこの時期だと貸し出しに時
間が掛かるからな・・・。」

「じゃ、じゃあ私が鍛えてやる！」

悩んでいるところに助け舟をだしてくれたのは箒だった！

「箒がか？・・・確かにいいと思う。たしか剣道ではかなりの実
力者って聞いているし。」

「それよりも、ISに剣道って関係あるのか？」

「じゃあ逆に聞くけどな。運動経験皆無のやつが高性能のIS乗る
のと、軍人が訓練機乗って試合したらどっちが勝つ？」

「そ、それは・・・、軍人かな？」

「当たり前だ。つまり、いくら高性能のISでも乗り手が悪ければ宝の持ち腐れってやつなんだよ。」

「な、成る程・・・。」

二トと軍人じゃ試合にもならないだろうけどな。

「天音の言うとおりで！今日から放課後に剣道場に行くぞ一夏！」

「え、えつと・・・。あ、天音は剣道やらないのか？！」

「なんでそんな必死なんだ？俺は行かないぞ？今日もやらなきゃならんことがあるしな。」

「り、リエルは？！」

「俺は射撃メインなんでパス。」

「俺に味方はいなかった！！！」

今日の放課後のこと（地獄）を考えると、もう既に試合に出れる気力がなくなるかもしれないと思っていた一夏だった。

くクラス対抗戦代表者選抜く（後書き）

誤字脱字・感想よろしくお願いします。

く決闘一戦目 天音 VS セシリアく

SIDE 天音

決闘当日、既に第3アリーナでは天音達が集まっていた。ただし、天音は朝から《ストライク》の調整による寝不足とイライラで若干不機嫌だ。

「そっぴゃ天音の《ストライク》まだ一次移行してないんだっとな、平気なのかよ？」

「ん、心配いらんよ。一応動力炉は稼働してるけど・・・、使える武装が装甲ナイフ（アーマーシュナイダー）と頭部バルカン（イーゲルシエル）だけだし。」

「ハハハ、それで大丈夫なのか？」

「へーき、へーき。一応調整はしたし。」

実を言うと、まだスラスターとOSを完成させたのみで、VPS装甲もビーム兵器もストライカーパックシステムも使用不可である。

「それよりも、リエルは一夏との試合考えてたほうがいいんじゃないか？」

「それはわかってるさ。一夏の今の實力も知りたいしな。」

「まあ今のアイツじゃお前に近づくのも不可能だと思うがな。」

「お前こそ、あんまり潰しすぎるなよ？」

「それはあんまり保障できない。」

リエルはかなりの実戦経験者であり、天音は研究所を出るまでは実際に搭乗していたためである。しかし、行動を共にしてからはほばリエルが動いていたため搭乗数は少ない。

『空川、そろそろ時間だ。早くビットに來い。』

「了解です、今からISスーツに着替えて向かいます。」

『早くすることだ。相手は待ちくたびれているぞ？』

「そうですか、それでも朝一番で来ていたのですが……。まあ相手に関してはどうでもいいです。」

「んじゃ俺も行くか。」

そう言うのと、待機状態の《ストライク》を腕につけリエルと一緒に歩き出した。

リエルとISスーツに着替えてからビットに着くと、既に一夏と筈が来ており《白式》について千冬さんの説明をうけていた。

「へえ、それが一夏の専用機か。」

「ああ。だがまだ一次移行していない、恐らく俺の試合の最中に済ませるはずだな。」

「あ、天音にリエル！てかよくわかったな。」

「今日届くって聞いてたし、話も聞いてたからな。」

「それよりも天音は試合だろう？いいのかこんなにゆっくりしていても・・・。」

「それもそうだな。早く行ってちゃっちゃと終わらせるわ。」

どうでもいいことだが、一夏と筈はなんで手繋いでるんだ？まあ今はいいか。

そう思い、欠伸しながら《ストライク》を起動させる。

その瞬間、腕の待機状態の《ストライク》が輝き、全身を灰色の装甲が覆い尽くした。

「これが天音のIS？！しかも全身鎧だと？！」

「すげえな。でも色が灰色だし武装もくないか？」

その通り。今のストライクは頭部のバルカンと腰部の装甲ナイフしか使用が出来ない。ビームサーベルも装甲ナイフに粒子を纏わすとともに、動力炉と火気管制システムの調整が済んでいないため事実上武装は2つである。

「早く行け空川、時間は過ぎているぞ。」

「了解です千冬さん。」

「織斑先生と呼べ。」

ガスッ！！

名前で呼んだら出席簿で叩かれた。恐らく遅れた罰も入ってるなあれ。

『お、オペレーターの槇原 京香です！い、以後、よろしくおねがいしましゅー！』

「ん、了解！」

初々しさ感じるオペレーターの声に答え、ピットのゲートに向かう。

足をカタパルトに乗せ、発進準備を整える。ゲートが開放され、そこから漏れる微かな外の光とアリーナにいるだろう女子の歓声が聞こえる。

『カタパルト接続完了

ゲートの開放を確認

進路クリアー

発進、どうぞ！』

「空川天音、ストライク、行きます！」

そして空へ上がった。

ストライクと共に第3アリーナ空中へ飛び立つ。

すると、空中では既に対戦相手のセシリア・オルコットが停滞していた。

決闘開始時間をとくに過ぎ、大分時間がたっていた。

「随分遅かったですわね、てっきり逃げたかと思いましたわ。」

「そうか、自分としては逃げたかったのですがここいらで叩き潰してあげるのも悪くないと思います。」

「……あまり調子にのらないほうが宜しくてよ？」

セシリアの視線には、完全に男を見下し、侮蔑を含んでいた。

「男の時代は終わりましたのよ？そんなこともわからないのかしら

「？」

「おいおい、勘違いするなよ？自分は別に男尊女卑だろうが女尊男卑だろうがどうでもいいし。」

「・・・なんですか？まさか私に勝てると思っていらっしやるのかしら？」

「さあな、どのみちこの試合で判る事だろ？」

「そうでしたわね・・・。」

しかし、『女尊男卑』が常識となった現代。それにより会場の女子も『まあどうせセシリアが勝つだろう』と思っている。

そのことに調子に乗ったセシリアは、人差し指を自分に突きつけ宣言した。

「最後のチャンスをおげますわ。わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。

ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら許してあげないこともなくってよ。」

そう言って目を細め余裕の笑みを浮かべるセシリア。

――警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行

――セーフティのロック解除を確認

セシリアの手には2mを超す長大な銃器、六七口径特殊レーザーイフル“スターライトMK?”が握られている。

そのスターライトMK？が自分に向けられる。

「そうか、だがそれはチャンスじゃないな。受ける気は欠片もない。」

「そうですか、お別れですわねっ！」

スターライトMK？から放たれたレーザーを避ける。

「っ？！ま、まだですわよ？！」

自分が避けたのが余程以外なのか驚きを見せるものの、すぐ次の戦闘行動に移る。

ブルー・ティアーズの背の4基のビットが機体から分離される。

「さあ、踊りなさい。
わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲を――！」

分離されたビットから放たれたビームが全方位から襲い掛かる。
それを空中で舞い踊るように回避し続ける自分。

その様子はまさしく、『円舞曲』。

時に頭部を、四肢を、胴体を捻り傾け回避する姿は、観客から見れば美しく見える。

そのまま回避をし続ける自分、開始から10分が経過しているが未だに被弾0である。

（てか、武装があれだからあんまり攻撃に転じにくいんだよね。）
そう愚痴る間に天音の脳は高速で初期化と最適化を済ませている。

「このっ！さっきからちょこまかとー！」

それでも試合は継続しており、全方位からビームが降り注いでいた。しかし、それを機体を捻り、傾けつつ回避し続ける。

（あのIS、なんて機動をしてるの？！さっきからあまり場所を動いていない？！）

ビットの射撃も、スターライトMK?の連射も避けられているが、ほぼその場から動いていないように見える（……………）。

「なんだ、代表候補生の実力ってこの程度なのか？もう飽きたんだけど……………」

「なっ？！馬鹿にしますの？！」

さっきよりもビームの勢いが増した。だがそれでもストライクには

掠りもしない。

「そろそろ反撃させてもらうよ。」

そう言い放つと、まず前方右のビットを頭部バルカンで撃ち落とす、後方左のビットへ腰のナイフを投げつけ爆散させる。

「っ?!」

「まだまだっ!!!」

上方のビットから放たれたビームを宙返りするように回避し、途中バルカンで1基落とし、セシリアへ向けてスラスターを全力噴射する。

「そんなっ?!でもまだですわ!」

「その程度っ!」

残り1基のビットがセシリアと俺を遮るように間に入り込みビームを打ち続けるが、全て射線を読んでいくかのように回避し、もう1本の装甲ナイフで切り裂く。

「くっ?!まさかブルー・ティアーズが・・・っ!?!」

「試合中に余所見してる暇なんてあったのか?」

既にビットはない。セシリアヘナイフによる斬撃を浴びせようと接近した瞬間。

「掛かりましたわね！ ブルーティアーズは6基ありましてよ！！」

そう言い放つと同時に、腰のブルー・ティアーズから発射されたミサイル型のビットが向かってくる。

「っ?!」

直前でスラスターを逆噴射させ、回避しようとするが距離を詰め過ぎたため直撃する。

しかし、それもこれも天音にとって予想通り。思わず笑みを浮かべてしまうが、そんなのかまいはしない。

「GNドライブ正常稼働確認

粒子電力変換機能調整完了

スラスター出力調整完了

VPS装甲電圧配分調整完了

神経再接続完了

メタ運動野パラメーター更新完了

ビームサーベル 出力調整完了

57mm高エネルギービームライフル 出力調整完了

アンチビームシールド 展開確認
ストライカーパックシステム使用可能確認

「エールストライカー」調整完了
「ソードストライカー」調整完了
「ランチャーストライカー」調整完了
「セブンソードストライカー」調整完了
「スナイパーストライカー」調整完了

フォーマット終了
フィッティング終了
全システムオールグリーン

GAT-X105ストライク システム再起動

ミサイルが直撃する直前、ストライクの再構築が始まった。

SIDE リエル

決闘開始直後

「すげえ、これが天音の実力・・・。」

「ああ、まさかオルコットと互角に渡り合うとは・・・。」

一夏と箒は驚きを隠せない。一次移行していないISで挑む以上、一夏達は心配していたが、それでも未だに被弾0である。

「腕は落ちてない、か。まあ一次移行前であれくらいなら鈍ってはいないな。」

「シューリベル、天音はISに乗ったのは何時だ？」

「詳細なことはわかりません。ですが、俺が知ってるだけじゃこれが3回目だ。」

「3回目でこれとは・・・。」

織斑先生も内心驚いているらしい。

天音はビット全基落とし、セシリアに斬りかからんとした瞬間、腰からミサイルが放たれ、直撃した。

「なっ?! 嘘だろ?!」

「そんなっ?!」

一夏と箒が、ストライクに直撃したのを見て悲鳴をあげる。しかし、千冬とリエルは至って落ち着いていた。

「り、リエルにちふ、織斑先生はなんでそんなに落ち着いてんだよ？！」

「あ？そんなの決まってるだろう……」

煙が徐々に薄れ、現れる。

「目覚めたのさ、アイツの機体が。」

S I D E 天音

黒煙が晴れるのをみて、セシリアは勝ち誇った表情をする。既に女子達も『勝負がついた』と思っているからか黒煙が晴れるのを黙ってみている。

しかし、自分達が思い浮かべた状況と違うことに、呆けてしまう。現れたのは、再構築が終わったストライクだ。

V P A 装甲を展開し、白銀の四肢に赤青白のトリコロール。

そして背部には、ラジエータープレート兼用の大型可変翼と4基の高出力スラスターを持つ高機動戦闘用ストライカーパック《エールストライカー》を換装し、左手にアンチビームシールドを掲げ右手に57mm高エネルギービームライフルを持つ。「翼」の意味を持ち、天音の『願い』を叶える為の機体。

「なっ、まさか一次移行?!あなた、今まで初期設定の機体で戦っていたと言うの?!」

「ああ、流石に戦闘中に初期化に最適化、さらにはOSの改変とかタイミング合わせるのに苦労したが。」

胸部の排熱口から粒子が排出され淡い緑色の粒子が宙を舞う。

「(今までと違う!スラスターからはさっきとは違って緑色の粒子が吹き出ている?!しかも戦闘中に済ませたですって?!わけがわかりませんのよ?!)ま、まだ負けてはおりませんわ!!」

そう言い、スターライトMK?を連射してくるが、エールストライカーを換装したストライクの機動力を利用し、高速でセシリアに近づいていく。

「そ、それでもっ!!」

後先考えずに、接近して来たストライクに向けて残りのミサイルを

放ち、全て直撃する。今度こそ、と思つたのも一瞬、爆煙の中から無傷でシールドエネルギーが減っていないストライクが出てきた。

「そ、そんな・・・ツキヤア?!」

「はあああああああああ!」

ビームライフルとシールドを上空へ投げ、両手でビームサーベルを抜き放ち刃を縦横無尽に振るう。

バチュツ、バチツ、バチツ、バチツ、バチ!!

一閃することに火花が散り、装甲が裂かれ斬り飛ばされる。

そして、シールドエネルギーがエンプティイ寸前になると同時にセシリアを蹴り飛ばし、ビームサーベルを収納して、落ちてきたライフルとシールドをつかむ。

「そんな・・・、こんなことが・・・っ!!」

「ありがとよ、おかげでストライクの性能実験することが出来た、感謝する。だから・・・、これで終わりにする!」

エールストライカーをパージし、新たなストライカーパックに換装する。

背部には、機動性を損なわない小型のスラスタに接近戦闘支援情報制御システムの内臓されたバックパック。その脇にマウントされ

た15・78m対艦刀「シュベルトゲベール」。さらに、左肩部には、アーマーと共にマウントされたビームブーメラン「マイダスメッサー」。左腕に装着されるロケット推進式のアンカー「パンツァーアイゼン」、強化高分子ケーブルのリールケースを兼ねた本体キヤニスターは対ビームコーティングを施したシールドとしても機能する。

「な、なんですその馬鹿でかい剣は?!」

「それよりも今の状況理解したほうがよくないか?」

「ツツ?!」

ストライクの接近を許さないかのように、ビームを連射してくる。背部の対艦刀を抜き放ち、ビームの連射をその身軽さを利用し接近する。

「くっ!この私が・・・っ!」

「ひとつだけ言っておいてやるよ、強さは性別なんかで決まらない。」

振り下ろされる斬撃を回避も出来ずに落とされるセシリア。

「力を持つやつで意思が変わるのさ。」

そして、斬撃を浴びせ、対艦刀をマウントし、空中に佇む天音。

勝負は、決まった。

『試合終了　勝者　空川天音』

観客席から凄まじい量の歓声が沸いた。

結果は自分の勝利だが、あまりの歓声に耳が痛くなった。

「はぁ、終わった。眠いダルイさつさと戻る『おい、天音。』・・・
・なんだリエル？」

『下見ろ、落ちてるぞ？』

「はぁ？」

下を見たら、セシリア・オルコットが落ちていた。おそらく、さつきの衝撃で気絶でもしたんだろう。歓声も絶叫マシーンさながらの悲鳴に変わってるし。

「はぁ、助けなきゃいけないのか？」

「早く助ける、お前しかないだろ?!」

「わかったわかった、怒鳴るなつて。」

そう言うと、エールストライカーに換装して一気に加速しセシリアを抱き抱える。

「 「 「 「 「 「 「 「 「 「 「 「
 キヤ
 ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
 ア ア ア ア ア ! ! 「 「 「 「 「 「 「 「

悲鳴から歓声に変わるといふ。しかも観客席全部から。すると、その音量で目覚めたのか、セシリアが目を開けていた。

「あ、れ……？　なん、で、わたくし……は？」

「え、は、離して下さい／＼／＼／＼／＼／。」「

「離せばこのまま地面に衝突、天国の扉開けるか？」

「うっ……／＼／＼／＼／＼／」

そう言々と大人しくなり、天音はそのままビットへ戻る。

ビットに無事着陸し、セシリアを下ろしてストライクを待機状態に戻す。

「ふわっ、眠いし疲れた・・・。」

「お疲れさん、少しそこで休んでろ。」

「天音、すげえな！カッコよかったぜ！」
「すごいな天音は。最後は驚いたが……。」
「ん、いいけど少し休ませてくれ……。」

そう言っただけはビツト内のベンチで横になり、試合の疲れをとるために眠りに落ちた。

SIDE リエル

天音は寝たか。まあ久しぶりの実戦だから仕方ないのか？……違うな、昨日殆ど寝てないからだ。それにしてもそこまで不機嫌だったのか？まさかソードまで使うとは……。
すると、千冬先生が山田先生と一緒にこっちへ来た。

「2人ともご苦労です、とてもいい試合でしたよ、って空川君は？」

「ああ、アイツならあそこのベンチで寝てますよ。」

そう言っただけ天音が寝ているベンチを指差す。そのすぐそばにセシリアがいるんだが……、何故だ？まさか……、惚れたか？惚れたな。顔紅いし。まあいいや。

「まあいいだろう。次の試合は織斑、シューリベル、お前らだ。早く準備しろ、時間が惜しい。」
「わかりました。」

そう言い、俺はゲートへ向かう。

S I D E セシリア

空川天音、今日の前で疲れたのか泥の様に眠っている。

（今の試合は……。）

彼女は負けたのだ、目の前の男に。
一発も射撃で当てることはできず。
当たったミサイルもダメージはなく、シールドエネルギーも減らせず。

（……空川、天音。）

彼は何を思っただろう？

戦闘中に最適化と初期化を済ませながら初期設定で戦った男。
力の意味を知り、教えてくれた。

普段の気だるげな雰囲気とは違う、一瞬だけ感じた鋭さ。

（父とは、まったく違う男の人・・・）

婿養子という立場の弱さから母親に対し卑屈になる父親に対しては
憤りを覚えていた。

それに対して、男尊女卑の時代であったころから実家発展に尽力し
た母親のことは尊敬していた。

しかし、その2人はもういない。

12歳の頃に両親を事故で亡くし、勉強を重ねて周囲の大人達から
両親の遺産を守ってきた。IS学園に入ったのも、両親の遺産を護
るためである。

そして学園で出会った、
思い描く理想の男性。

「空川、」

寝ている彼の頬をそっとなでる。自分の体が熱くなってくるのがわ
かる。

一瞬見た、彼の瞳の奥は何も見えておらず、しかし、1つだけ執着し

ているものがあつた。あれほどの力と技術を持っているのに、たった1つのことしか見ていない。

「天音……。」

抑えることのできない感情は、彼女をより熱くする。

「あなたは、一体何を見ているのでしょうか……?」

そう言い、無意識に彼と同じベンチに座り、頭を膝の上に乗せたままぼんやりとアリーナの状況を見るのだった。

く 決闘一戦目 天音 VS セシリアく (後書き)

更新遅れてすいません。

誤字脱字報告、感想お待ちしております。

〈決闘2戦目 一夏 VS リエル〉（前書き）

まず初めに、

Yuuさん、感想&アドバイス有難うございます！

一応この話の後にランチャーの順番考えていたのですがね、まだ話の内容からはそこまで高火力をストライクに持たせられません。

それと、ストライカーパックに関して言えば、話の内容が進んでいくうちに増やしていきたいと思ってます。

Dアストレイにあるマルチパックについてですが、それはストライクが二次移行した時にする可能性があります（あくまで可能性です）

他にも意見・感想・アドバイス等あればよろしくおねがいいたします！

ではどうぞ

く決闘2戦目 一夏 VS リエルく

SIDE リエル

既にゲートの前で愛機^{バスター}を纏い、発進する準備をしている。

「リエルのも灰色だけど、まさか・・・一次移行してないのか？」
「違うぞ？俺はアイツ（天音）と違ってちゃんと済ませてあるからな？」

「そ、そうか・・・。」

それにしても、天音のやつ。試合後対戦相手に膝枕されるとかマジ何してんだ？まあわかってるけど・・・、納得いかねえ。まあいいけどさ。

（にしても、こうして一夏と戦えるとは思ってなかったな、模擬戦みたいなものだが・・・、今の状態からじゃこれが限界か？）

考え事をしていると、オペレーターの声が聞こえてくる。

『お、オペレーターの榎原 京香です！以後、よろしくおねがいします！（やった！今度はちゃんと噛まずに言えた！！）』
「ん？オーライ。んじゃ一夏、先に行ってるぜ？」
「おう！」

そう受け答えし、足をカタパルトの上に乗せる。

『カタパルト接続完了
ゲートの開放を確認
進路クリアー
発進、どうぞ！』

「リエル・シューリベル、バスター、出るぞ！」

リエルが出たのを見計らって、一夏もカタパルトに足を乗せる。

（天音もリエルも言ってたあのセリフ、真似してみよっかな？）

「一夏、何をしている？早くいかんか馬鹿者。」
「ああ、わかってるよ千冬姉。きちんと千冬姉の弟だって証明してくるさ！」
「んんっ！そうか・・・。」

千冬姉って言ったのに何もされないのを逆に不気味に思いながらも
出撃準備をする。

『カタパルト接続完了
ゲートの開放を確認
進路クリアー
発進、どうぞ！』

「織斑一夏、白式、行くぜ！」

リエルの後を追うように、一夏もアリーナの空へ上がった。

発進したリエルは空中で一夏を出迎えるかのように佇んでいた。

そして、バスターの装甲も緑色を主体としたものに变化していた。
何よりも特徴的なのが、背部の2対の銃である。

「よお一夏、さっさと始めようか？」

「ああ、千冬姉の弟としてここで負けるわけにはいかねえ!!」
「そうか・・・、中々いい面構えをしてるな。だが・・・」

さつきまでの優しげで親しそうな感じが消え、右手にガンランチャ
ーを、左手にはライフルを構える。
対して一夏も唯一の武装、雪片式型を構える。

「現実には気持ちだけでどうにかなるもんじゃねえぜ?」

その言葉を合図にリエルのライフルからビームが放たれる。

「クッ!は、早い?ッッあ?!!」

「おお、俺の早撃ちを避けるなんてね。だが、まだまだいくぜ?」

寸前で回避に成功した一夏だが、ライフルの連射を回避出来ず、シ
ールドエネルギーを削られる。

(な、なんとか距離を詰めれば・・・!!!)

「距離を詰めれるなんて思うなよ!」

「なんでわかって・・・ッ?!!」

「戦闘中の思考は1秒でも惜しいぞ?」

自分の思考を読まれて一瞬動きを止めた一夏に、リエルは右手に構

えていたガンランチャーからも砲撃を開始する。

ガンランチャーの散弾銃らしく、広範囲に弾が飛んでくるため回避しようにも当たってしまう上に、先程からの、左手のライフルの連射を回避するも、回避した先にビームがくるためシールドエネルギーの消費は半端がなかった。

（く、クソッ！！なんとか突破口を開かないと、このままじゃやられる？！距離を詰めようにもアレ（・・・）を使えばエネルギーが・・・、って考えてたらどんどん減っちゃう！一体どうすりゃいいんだよ！）

「（一夏、また何か考えているのか？だが、何か思いついた感じだな。）このままじゃ何も出来ないまま負けちゃうがいいのか？」

「そうはいかねえ！」

そう言い合ってる間にも一夏のエネルギー残量は180と残り少ない。

（こうなったら、被弾覚悟で行くしかねえ！それに、この砲撃は交互にライフルと散弾が来るけど、その一瞬の間だけ射撃がない！そこをつく！）

「うおおおおおおおおお！！！」

「ッ？！やらせるかよおっ！！！」

突っ込んできた一夏に一瞬驚いたものの、すぐ散弾とビームの雨を浴びせるが、それでも一夏は止まる様子がない。

「まさか、ライフルとガンランチャーの発射時のラグを利用したのか?!まさかこの短時間で?!ッ!!」

「この距離なら!くらえええええええ!!」

銃弾の雨を潜り抜け、白式の射程距離に入った一夏は雪片式型からエネルギー刃を生成する。ワンオフアビリティ『零落白夜』を発動したのだ。これを食らえば、いくらVPS装甲を持ったバスターでもかなりの痛手となる。

回避しようとしたバスターのガンランチャーとライフル共に切り裂き、本体を切り裂こうと刃を振り下ろした

「惜しかったな、一夏。あと少しでやられるところだったわ。」

「そ、そんな・・・!射撃特化型じゃなかったのかよ?!」

刃が届く寸前、リエルは両手の銃を捨て、後ろ腰にマウントされたビームサーベルを両手で抜き放ち、一夏の斬撃を受け止めていたのだ。

「悪いな一夏、これは天音が取り付けたのさ。もしもの時の保険として、な!」

「そ、そんな!!」

「だが、今回はここまででいいか。はい終了。」
「え？」

刹那、一夏に衝撃が襲い掛かる。エンプティ―寸前だったエネルギーは0になってしまった。

『試合終了 勝者 リエル・シューリベル』

天音の時以上の歓声が響き渡った。

ビットに戻ったりエルと一夏を待っていたのは千冬さんだった。

「なぜ負けたかわかるか一夏？」

「い、いや・・・、はつきいって最後何が起こったのかさっぱりだったぜ・・・。」

「はぁ・・・、まったく馬鹿者が。」

1つ、自分のISの特性を理解していなかったこと。

2つ、攻めるのに時間をかけ過ぎてエネルギーを減らしすぎたこと。
そして3つ、きちんと武装を把握してなかったことだ。」

「そ、そんなに・・・。」

「上げればまだまだあるがな。」

千冬さんの容赦のない言葉に項垂れる一夏。だが、言ってることは正しい。

一夏の機動は初心者故に余りにもお粗末だった。回避や飛行にも余計な動きがあったし、バスターのラグを理解するのも遅かった。なにより、白式のワンオフアビリティのバリア無効によるシールドエネルギー消費の理解をしてなかったこと。まあ初心者にはまずまずだが。

「これからは空川とシューリベルに鍛えてもらえ。篠ノ野も一夏の付き添いとして一緒に受ける。いいな？」

「わかったよ千冬姉。」

「い、一夏がやるなら・・・！（これで一夏と一緒にいられる時間が増える！）」

「シューリベル、空川には言っておいてくれ。」

「オーライ、まかせときなつて。天音には俺から言つて」

「その必要はないよ。」

「ん？起きたのか。」

リエルのセリフを遮って現れたのは、起きたばかりで眠いのか半分ほど目が閉じかけている天音だった。後ろには頬を赤くしたセシリアがいるが、ホントお前ら何してたんだ。

「そのことも含めてだが、明日からやりたいと思います。課題は山

積みですからね。それと、千冬さんには訓練場を貸し出す許可を貰いたいんですが？」

「ふむ、まあ出来ないこともないだろうが・・・、篠ノ野のはどうするんだ？訓練機を貸し出すには」

「それについては問題ありません。こちらにも一式そろえてあるんです。」

「そうか、ならいいだろう。あとで詳細は知らせるように。では解散だ、気をつけて帰るように。」

そう言い、長かった一日は終わりとなった。

SIDE 天音

長かった1日が終わり、いつもの4人＋セシリアで寮へ向かっていた。

「結局さ、代表ってどうなるんだ？天音とリエルが試合するのか？」

「え、そんなめんど・・・大変なことするわけないだろう？」

「ああ、俺はそういうの似合わないしな。」

「そうになると、オルコットか？」

「いえ、私も遠慮させてもらいますわ。それと私のことはセシリアと呼んでくださいまし。」

「え、えっと……、天音？」

急に親しげなセシリアに一夏は戸惑っていた。まあ昨日まであんなに自分達のことを見下してたのに、いきなり「名前で呼んでいい」なんて言われればね。

「いいじゃないか一夏。彼女も心を入れなおしたってことでよ？つてことでセシリア、リエル・シュールベルだ。あらためてよろしくたのむわ。」

「篠ノ野箒だ、よろしく頼む。」

「わかった！俺は織斑一夏、あらためてよろしくな。」

「ええ、みなさんよろしくおねがいます。それと今までのご無礼、真に申し訳ございませんでした。」

「いってことよ。謝っただけでもいってことさ。」

こうして俺達のグループにセシリアが新たに入った。

「ところで天音。私の訓練機の用意についてはどうするつもりだ？」

「ん？ああ、それは明日の放課後のお楽しみってことで。」

「あ、天音？まさか明日からじゃ……？」

「当たり前だ。こつゆうのは早めにしておいて損はないしな。」

「うう……、そ、そうか……。」

その後は寮につくまで普通の雑談やらをして各自室に戻っていった。

（しかし……、妙にセシリアが近いし話しているとニコニコしてるんだが……。何故だ？そこまでももしろい話してないのにな。まあリエルに聞けばわかるか。）

「ふわ……眠い。さっさと寝よう。リエルおやす……」
ZZZ。」

「ああ、お休みって寝てるし……。」

そして長い一日が終わった。

く決闘2戦目 一夏 VS リエルく（後書き）

感想・アドバイスお待ちしております。

ゝ実習とパーティと深夜のお仕事ゝ（前書き）

まず、更新遅れて申し訳ございません。（汗）

部活にバイトに宿題と投稿する暇がなく更新が遅れてしまいました。

前回の一夏がやられた原因ですが、それは今回わかります。

「実習とパーティと深夜のお仕事」

SIDE 天音

次の朝、天音達は教室で昨日の決闘について話していた。そこで一夏は昨日の自分が最後にくらったことについてリエルに問いただしていた。

「リエル、昨日の最後のアレ。いったい何やったんだ？」

「ん？腰のレール砲をぶっ放したのさ。わかんなかったのか？」

「え、腰にそんなの着いてたっけ？」

「一夏、まずは相手を見ないと駄目だぞ？見た目で判断するのもよくないが、身に着けてる武装くらいは警戒しないとな。」

「うっ……。」

「それに、いつまでの鏖張り合いつてるから至近距離で砲撃貰ったんだしな。攻めるタイミングが遅かったおかげでシールドエネルギーが余計に減らされるし。」

「うううう……。」

「まったく……、情けないぞ一夏！」

「グハッ!!」

リエル・天音に駄目だしをくらい、止めに幕の「情けない」の一言で完全に一夏は堕ちた。

「まあまあ、それくらいにしてあげましょうよ皆さん？」
「せ、セシリア……。」

そう言って助け舟を出したのはセシリアだった。余談だが、その時のセシリアが一夏に女神様に見えたのは内緒である。

「彼もISに乗って2回目なのでしょう？リエルさんの射撃を避け、防がれましたけれども一太刀浴びせたのですから。」

「まあそうだな、そこに関しては文句はない。むしろ自信を持ってもいい。」

「そ、そうだよな!!」

「まあ俺はまだライフルとガンランチャートッキングを連結させてないからな？」

「……へ？」

一夏の束の間の喜びも一瞬でリエルが吹き飛ばした。

「ど、どういうことだよ天音?!」

「ん？《バスター》の由来は『砲撃』だろ？バスターのライフルとガンランチャーを連結すると威力が格段に上がるんだ。それに発射時のラグも腰のレール砲を使えば解消される。」

「つまり、リエルは昨日本気でしていなかったのか？」

ぜ、自分、が、代表なん、です、か?!」

思わず千冬姉と呼ぼうとした瞬間出席簿が見事に頭を打ち抜かれ、一夏は途切れ途切れにもっともな質問をした。

「理由は空川とシューリベルが辞退したからだ。」

「な、なんだってえん!!!!」

すると一夏はこっちに振り返り思いっきり至近距離（鼻先3cmくらい）まで近づいてきた。

「自分が辞退した理由は一夏はまだ初心者だからだ。」

「ど、どういう意味だよ?」

「つまりだな、初心者の方が教え込ませることが多いし、まだ経験も少ないから変な癖も出ていない。それに今後の伸びしろを考慮した上での考えさ。」

「それに代表って立場から考えると試合の回数も増えるから実戦形式で戦えるんだ。」

「な、成る程……。」

もっともらしいことで無理やり納得させられた一夏だが、しきりに首をひねっている。

「……実はもっともらしいこと言っておいて、実は面倒だか

らって断ったりして？」

「おお！！それドンピシャだ。」

「ふっざけんじゃねええええええええええええええええええ！！」

ゴスツツ！！！！

いつも以上に鈍い音がしたと思ったたら千冬さんが出席簿の『角』で一夏を打ち抜いていた。余りの痛さに涙目になっているように見える。

「大声を出すな、まだHR中だぞ。」

「で、でも・・・」

「クラス代表は既に決まったと報告してある。いくら文句を言っても遅いぞ？」

「そ、そんな・・・。」

「ではこれでHRを終わる。次の授業はISの実習だ。ISスーツを着用し速やかにグラウンドに集合するように、以上だ。」

本日二度目のorzをしている一夏を華麗にスルーし、去っていく千冬さん。

「一夏早くいくぞ、遅れて出席簿はやだからな。」

「・・・・・・・・・・。」

「駄目だわ天音、一夏死に掛けも同然だぞ？」

「し、仕方のないやつだ。わ、わたしが運んでやろう。／／／／」

そう言つて一夏を背負つたのは筈だった。にしても男の一夏を背負うとかすげー。

「では天音さんも一緒に行きましょう。」

「ああ、更衣室前までな？」

「わ、わかつておりますわ。／＼／＼」

そう言つてセシリアに連れて行かれる自分。

「俺だけハブるとか酷くね？」

「ドントマインド、リエル（笑）。」

「うるせえっ！」

そして1人後ろからついてくるリエルだった。（笑）

現在グラウンドには、ISスーツに着替えた生徒達が集まっている。

ちなみに天音のスーツは黒を基調として所々に紅のラインが入っていて、リエルのスーツは同じく黒を基調として所々に緑のラインが入っている。それと、他の生徒達とは違いへそを出さないタイプにしている（天音が嫌がったため）。

「本日よりISの実習授業を行う。まずは専用機持ちに手本を見せてもらおうか。織斑、空川・オルコット、前へ出る。」

「せんせー、俺はお手本とやらをしなくてもいいのかい？」

「ああ、あまり人数が居ても邪魔だからな。」

「オーライ。」

（リエル楽でいいな。まあ《バスター》は遠距離支援砲撃だからやらなくても構わないんだが・・・、動力炉のおかげで機動力もあがつてるから自分じゃなくてもいいのに。）

と心の中で愚痴りつつも《ストライク》を起動する。そしてVPS装甲を展開し鮮やかな赤青白になる。トリコロール

「決闘の時もだけど空川君のISって綺麗だよな。」

「そうそう！あの緑色のやつとかがまわりで浮いてるから余計にね！！」

「あゝ、でも前よりもシンプルじゃない？」

「でもやっぱりカッコいい！！」

ストライクのまわりにはGN粒子が舞っており、女子達から見ればこの光景は地上に舞い降りた天使を思わせる。そしてまだストライクはバックパックを換装していないため一次移行前と姿はほぼかわらない。

「はあ、やっぱり面倒だな・・・、リエルに変わってほしいんだけど。」

そう思わないセシリア？」

「え、ええ……って駄目ですわよ天音さん！織斑先生に呼ばれましたのよ？／＼／」

「それはそうだけど……、てかなんで頬赤いの？」

「な、なんでもありませんのよ！／＼／」

「それならいいがな。」

（あまりに美しすぎる姿に目を奪われたなんて恥ずかしくて言えませんが！／＼）

セシリアの態度がよくわからない……、っと、一夏も既に展開できてるな。

「遅いぞ織斑、熟練のIS操縦者なら展開に1秒と掛からん。」

「う、だってよ……。」

「……一夏の訓練メニュー追加、とお。」

「あ、天音？それって何だ？」

「ん？訓練メニュー。一応一夏とセシリアと第全員のメニュー考えたぞ。」

「ホントですか天音さん？！見せてください！」

「俺にも見せてくれないか？ってアイダッツ？！」

「イタツ？！」

「静かにしろ馬鹿者。」

2人で話し込んでいたら千冬さんが出席簿で殴ってきた。当然自分は回避、一夏は話し込んでたから回避不可、セシリアは女子だから少し手加減してある、『少し』は。

「ではISの基本的な飛行操縦を実演してもらつ。空川、織斑、オルコット、その場から急上昇しろ。」

「はい！」

「りょーかい……。」

先にセシリアが飛び、続いて天音が膝を折ってジャンプした瞬間スラスターを噴射し急上昇してあつという間にセシリアを抜き去る。一夏も続いたのだが、随分と遅い。

『遅い、ストライクはともかくスペック上の出力ではブルーティーズより白式のほうが上だぞ！』

「そう言われても……。」

確かにスペック上の出力ではブルーティーズより白式のほうが勝っている。しかし、代表候補生のセシリアと白式展開2回目の一夏とでは操縦技術も違う。

「飛行のイメージは確か……、前方に角錐を展開するような感じで……。」

必死に教本の中身を覚えた（半ば強制的）一夏だが、思うようにいかず白式の速度は変わらなかった。

そこにセシリアが速度を落とし、近づいてくる。

「一夏さん、イメージは所詮イメージですわ。」

「セシリア・・・、そう言うのもわかるけど。大体空を飛ぶ感覚に慣れないんだよね。てかどうやって浮いてんだこれ？」

「どうやって浮いているのか説明しましょうか？長くなりますけど・・・。」

「い、いいよ。遠慮しとく・・・。」

正直言つて天音の授業（地獄）で頭が既にパンパンな上に、今日から訓練がある一夏の脳の処理速度は追いついていなかった。

「それに、見本は目の前におりますわ。」

「え、目の前？・・・。。。。。。つてはあ？」

（2人して何こっち見てるんだ？）

2人の視線・・・、いや、クラス中の視線を受けても意味がわからず飛行を続ける天音。

しかし、空中でロールしたり宙返りしたり三角跳びをしたり等曲芸染みた機動をしている天音を見てクラス中が呆然としていた。

『何を遊んでいる空川！！今は実習だぞ？！きちんと真っ直ぐに飛べ！』

「遊んでないんですが……、まあ分かりましたよ。」

そう言い一夏とセシリアの居るところに戻る。

「何してんだ天音……？」

「いや、久しぶりに空飛んだからさ。つい楽しくなってさ。」

「そ、そうか……。」

自分のしていたことに何も思っておらず、『楽しくなって』という理由で曲芸をしていた天音の顔を呆然とした顔で一夏は見つめてしまふ。

『無駄話はその辺にしておけ。次は急降下と完全停止だ！ 目標は地表から10cm。空川、オルコット、織斑の順番で降りて来い！』
「りょーかいつと。んじゃお先に失礼。」

（一応エールストライカーに換装しておくか。）

急降下を始める前に《エールストライカー》に換装する。

そして、千冬さんの指示に従い地面へ向かって急降下を始める。エールに換装したこともあり、先程とはスピードが段違いだ。スラスタからは粒子が舞い散ってストライクを幻想的に魅せている。

そして地面へ激突する寸前、地上へ向けて背部のスラスタを全力噴射し急停止し、脚部のスラスタを噴かせバランスをとると、地

上から僅か1cmの所で停止していた。

「ふむ・・・、流石といったほうがいいか？」

「いえいえ、しばらくぶりなのでまだ鈍ってますね。地上スレスレまでいきませんでしたから。」

「そうか。それはまた今度の機会に魅せてもらおうか。次、オルコット！」

珍しく千冬さんが褒めたことにクラスメイトはおろか、山田先生まで驚愕の眼差しを向けているが無視してセシリアを待つ。

次に急降下してきたセシリアは、地上10cmの所で停止した。流石は代表候補生、安定した操縦だった。

「うむ、流石だな。地表10cmぴったりに止めたか」

「これくらい当然のことですわ。」

「次、織斑！！」

そして最後は一夏だ。急降下し始めたが、バランスを崩したのか速度を落とさずにグラウンドに激突してしまった。

「馬鹿者、グラウンドに穴を開けてどうする！」

「見事な大穴だな。」

「だな。」

「関心している場合か?!一夏、無事か?!」

千冬さんの怒声が飛び、リエルと自分の感心したような声が出て、
箒の心配そうな声が響く。すると穴の中に地面に顔を突っ込んだ一
夏が現れる。箒は焦った様に穴に飛び降り一夏のもとへ走って向か
う。自分もリエルとアイコンタクトし、リエルに向ってもらう。

「天音さんは行かなくてよろしいのですか？」

「ん？リエルが行ってくれるからな。」

「そ、そうなのですか……。……。では。／／／／」

「ん？どうかしたのかセシリア？」

「な、なんでもないですわ。／／／／」

つて言っても真っ赤だし、さり気無く近づいてるし。それにあんま
り視界に入らないでもらいたい。ISスーツは体のラインが出るか
らそれはもう“色々”と危ない。

そうしてると、リエルが一夏を背負い、箒が心配そうに見ながら上
ってくる。

「一夏は無事か？」

「ああ、ISのおかげで無傷だ。ただあの速度で地面に突っ込ん
だからな、衝撃で少しふらついているな。」

「わ、わりいリエル……。態々運んでくれて……。。」

「なーに、気にすんなっての。」

「あまり無理をするな一夏！そ、そうだ、保健室へ行こう！」

「い、いや、そんなに心配しなくても平気だって箒。」

「し、心配などしていない！こ、これ、これは・・・、その・・・、
・・・、そう！！お、幼馴染として当然のことだ！！／＼／＼
／＼／＼っ！何故素直に一夏が心配だと言えないんだ？！」

甲斐甲斐しく世話を焼く篤も幼馴染思いだよな／＼ってつくづく思う。
んで、リエルは何故俺のこと呆れた目で見るんだ？腹立つからやめ
る。

「織斑、自分で開けた穴は自分で埋めておくように。“自分”でな
？」

「わ、わかったよ・・・。」

相変わらず厳しいね／＼、・・・・・・表向きは。誰も見てないから
ってあからさまにホッとした顔になる千冬さんは、やっぱり心配な
んだらうな／＼。

「一夏も怪我がないことだし、戻ろうか。」

「オーライ。一夏、肩貸そうか？」

「い、いや。もう大丈夫だって。」

「む、無理をするなよ一夏？」

「わかってるよ。」

そしてみんなで更衣室へ向かおうとした。が

「空川、少しいいだろうか？」

「？なんです千冬さん？」

突然小声で呼ばれ、廊下の隅まで連れて行かれる。何故に？

「着替えるときに一夏の体に痣や打撲、異常がないか見てもらえるか？」

「ははは、ほんとに一夏が心配なんですね。」

「い、いいから早く着替えて教室に戻るように。授業に遅れるなよ。」

「りょーかいしました、千冬さん。」

一夏に怪我がないか調べてくれって頼む千冬さんは、ほんとに弟思いなんだと思う。・・・・・・ブラコン？そんなの知るか。

S I D E リエル

今日の授業が終わり、放課後。訓練場へ向かおうとしていた俺達のところに布仏(?)さんがかな〜りゆったりしたペースで近づいてくる。

「えりー、おりむーのお祝いパーティーくる〜?」

「ん?パーティーって一夏のか?ってえりーってまさか俺のあだ名?」

「そうだよ。寮の食堂だよ。」

「ああ、もちろん行くぞ。一夏と天音には言ったか?」

「ん〜、おりむーには言ったよ〜。ふわふわにはこれから言つよ〜。」

一夏には言ったらしい、ってことは箒が来るな。んで、天音に言えばセシリアも来ると。・・・まあクラス代表就任記念パーティーだからクラス全員が来るが。って・・・。

「ふわふわってもしかして天音のことか?」

「そうだよ〜。名前が空に関係してるからね〜。」

確かに、名前の半分が空に関するし。天と空を組み合わせれば『天空』、天と川で『天の川』になるしな。少し無理やりな気がするが。

「んじゃ〜行つて来るね〜〜。」

「行つてらっしゃい。」

まあ天音の反応が楽しみだな。どんな表情をするのか想像するだけで笑えるぞ。

ってパーティーってことは今日は訓練なしか。明日からだな。

「リエル、あののほほんなんだ？なんだよふわふわって・・・、あだ名じゃねーよあれ、完全に馬鹿にしてるよ。」

「まあ気にするなつて。あれは好意だ、素直に受け取るうぜ？」

「・・・はあ、もういいよ。気にしたら負けだ。さっさと食堂に行こうぜ。」

「オーライ。」

少し自室へ戻り、用事を済ませ食堂に着く。既に1年1組の生徒達が全員揃っていて、案内される。席に着いたが・・・リエルが一夏の隣、その横に天音、天音の向いにセシリア、一夏の反対側に箒が座っている。

「よお、もうすぐ始まるところだったぜ？」

「悪い悪い、少し部屋に戻っててな。」

「そうだったのか。っと、ちょうど始まるな。」

見ると俺達の分のジュースとクラッカーが置かれ、全員が既に構えている。

「それでは！ 織斑君のクラス代表決定おめでとうーっ！！」
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

クラッカーが鳴り響き、それぞれが手に持ったグラスで乾杯をする
とパーティーが始まった。

「織斑君、がんばってね！！」

「応援してるから！」

「え、ど、どうも……。」

女子達はかなりのハイテンションになっており、一夏は着いてい
てない。

俺は普段話さない奴等と適当に話している。天音は……。、
まあほつとこつ。

「リエルさん、天音さんはどちらに？」

「ん？天音か……。天音なら」

「あ！いたいた。織斑君にシューリベル君！」

セシリアに天音の場所を教えようとしたら呼ばれたので振り返って
見ると……。、向こうから二年生らしき生徒が向かってくる。

「話題の新入生のインタビューに来ました。新聞部副部長二年の黛薫子です。はいこれ名刺、よろしくね！」

「へえ、名刺なんて洒落てるねえ。」

「おお、お褒めのお言葉を頂き真に光栄でありますねい！」

意外とノリがいい人だな。って新聞部ってことは取材だよな？

「んじゃ、まず織斑君に……。ずばり！クラス代表になったことについて聞かせてくれる？」

「えっと、取り合えず頑張ります……。」

「え、在り来たり過ぎるよ？まあいいや……。捏造するし。」

「「うおい!!」」

捏造って……。いいのかそれで？

「シューリベル君に質問！なんで代表を辞退したの？」

「簡単さ、一夏に経験を積んで欲しいんだよ。一夏は俺達と違ってISの起動数が少ない、だからISの機動についてまだ経験が浅くてお粗末。それに、経験は何事も大切だからさ。」

「おおー！これは捏造する必要なしだね！」

それでも困るんだがな。

「あれ？最後に天使君に聞こうと思ったんだけど・・・。」

「「天使君？」？」

「知らないの？空川君のことをみんな『舞い降りた天使』って呼んでるよ？」

「ホントか？！」

「確かに天音さんのISは綺麗ですからね。」

確かに俺の《バスター》ははつきしいって地味だ。それに引き換え
《ストライク》は一次移行ファーストシフトの時の出方が余りにも印象的だったしな。

「そんなことよりも！！空川君はどこかな？！」

「そうですわ！天音さんはどこにいらっしやりますの？」

「あいつならあのテーブルに居るだろう。」

「ああ！痛い・・・た・・・え？」

「あら、あんな・・・とこ・・・ろ・・・に？」

天音を見つけた2人は目に写った光景に驚き思考が止まっている。
まわりの女子達も釣られて見ると、これも動きが止まってしまっている。

「んぐ・・・はぐ・・・んご・・・ぷふう、ってなんでみんな固まってるの？」

「お前が原因だ。」

「あまあま、このケーキもおいしいよ。」

「なんだと？！一口くれ！」

「はい。」

そのテーブルには天音とのほんさんこと布仏さんが一緒にケーキを食べていた。だが、その食べている量が問題だった。

ケーキが乗っていたとされる皿が高層ビルのように並んでおり、ゴミを入れる袋にはかなりの量の菓子の袋や包装紙が入っている。

当の本人は、綿飴を片手に布仏さんが差し出すケーキを食べさせてもらい、片手でパフェを食べている。

「こ、これ・・・、全部天音が食ったのか？」

「ん？当たり前だろ？のほんも少し食べたぞ？」

「そうだよおりむー、はい、あゝん。」

「ん？あむ。」

「こ、これだけの量をほとんど1人で？」

「おお、ってこのケーキうんまつ！！」

余りの量にインタビューに来た2年生も固まっている。一夏と箒は天音の異常な糖分摂取量に逆に引いている。

だが、他の女子達がじよじよに動き出し、2人の様子を見て

「な、何公然の場でイチャついてるのですかあああああああああ
あ？！？！」

セシリアが叫んだ。叫ぶと同時に天音に詰め寄ってる、ご愁傷様。

隣の2年生を見れば・・・、頬が引きつってる。

「……すごいね、この量。し、知ってたの？」

「ああ、結構付き合い長いからな。これでも少ないが。」

[illegible]

まわりの女子も叫んだよ……。

「でもある意味スクープだね。『特報!! 噂の天使は実は極度の甘党だった?!』、よし、今月はこれとインタビューを捏造していこう!!!!」

「いや、捏造すんなって！」

「そうだ！記念写真撮らせてよ。はいはい専用機持ちの4人集まってる！！」

「話を聞けえ！！」

まったく話をきかないどころか勝手に進めやがった。こんなのが取材者なのか？

「な、なんですか?! 今天音さんと大切なお話があるというのに!」

「大切なお話？……はっ！まさか告白？！」

「なっ？！ち、違いますわ！／＼／＼」

「おお、その反応から見ると図星だね？ スクープスクープ♪」

「だ、だから違つと……」

「（ボソツ）これから記念撮影だけどさ、後で加工して2ショットみたいにしておげようか？」

「さあ皆さん！早く集まってくださいまし！」

「（ニヤリ）」

なんか今の瞬間セシリアが買収された気がする。まあ気にしない方向で行こう。

「ではでは、右から織斑君、シュールベル君、空川君、オルコットさんの順番で並んで……、あ、そうだ！隣同士で手を繋いでもらえるかな？」

言われたとおり手を繋ぐが……、セシリアが天音と手繋いでるから真っ赤なんだが……。

「はーい、いくよ……、1+1は？」

『につ……！……！』

シャッターを押す直前、箒が一夏の空いた手を取り、リエルの後ろから1人女子が押されたように抱きつき、天音にはのほほんが後ろから、セシリアは入ってきた女子に押されて正面から抱きついてしまい、クラスメイト全員が入り込んだ。

「な、な、なんでみんな写っていらっしやるの?! / / /」

2年生から写真提供があるとはいえ、折角天音と写れる機会だったのだが、見事に邪魔されたように見えるが、セシリアは未だに抱きついたままである。

「お、おい、大丈夫か？」

「は、はい! / / だ、大丈夫でしゅ!! (ああ、また噛んじゃった! しかも抱きついちゃったし!!)」

俺に抱きつくようにぶつかってしまったのは、決闘の時オペレーターをしていた槇原さんだ。

「ん、筈? どうかしたのか？」

「い、いや。なんでもないぞ一夏!! / / / (一夏と手を握ってしまった!!) しかも写真に収められるなど・・・!! / / /)」

そんな騒がしくも楽しい時間はあっという間に過ぎていくのだった。

パーティーが終わり、自室へ戻ってシャワーを浴びた後、戻るとパソコンと向かい合っている天音がいた。

「ふう、流石に疲れたわ。」

「ああ、まったく。ところで何やってんだ？」

「ん？ああ、艦船の設計とか残りのドライヴの活用とか新しいパツクの開発だな。」

「ああ、成る程な。」

「艦船の開発の目処は立てた。残りのドライヴは3基の活用法も一応。パツクも大体はな。」

たった1人でここまでするとは、流石としかいいようがない。

ちなみに開発はここじゃないぞ？

「だがな、どうしてもトランザムシステム（TRANS・AM）の調整が上手くいかなくてな。」

「それか・・・、どうしてだ？」

「わからん。持ち出したときには既に使えるようになってはいる。だが、使えばドライヴがオーバーロードする可能性がある。最悪、IS自体が展開不可になる。」

「それはなんともまあ・・・。」

戦闘中に動きを止めることはおろか、展開も出来ないなど既に命がないに等しい。

「どうすんだ？確かにまだ必要ってわけじゃねえんだろ？」

「ああ、だが奴らは生きている。あれだけ潰したのに未だに《研究所》が残っているんだ。」

「……………」

「それに、潰した研究所は全部末端だ。ろくな情報もなく、使えるものもない。」

「…………それで？止めるのか？」

聞いた瞬間、俺は今まで数えるくらいしかみたことのない、多分学校のやつら知らない天音の顔。獰猛で、それでいて冷酷で、狂ったような目をしている。

「絶対にやめるわけにはいかない。止まることも、諦めることも。」

「そうか……………」

「また見つけた、今度は俺が行く。」

「ここはIS学園だぜ？見つかったら大変だぞ？」

「粒子の効果を忘れたか？通信の妨害にリーダーにも映らん。」

そついやそうだったな。つと、表情がいつもどおりになった。

「んじゃ、おやすみエル。」

「ああ、行つてらっしゃい天音。」

天音は俺との挨拶を終えると、ストライクを纏い夜の空へ舞い上が

った。

「・・・寝るか。」

天音を見届けた俺は、天音の無事を願い、日ごろの疲れをとるために眠りについた。

S I D E セシリア

まったく、天音さんはあんなに布仏さんにくっついて！！あまつさえ『あゝん』なんて！！私でさえ今日手を握ったり・・・、だ、抱きついたり・・・。って布仏さんも抱きついていたんじゃないんですか？！

「・・・冷静になりなさい私。私にはこれがありますわ。」

そう言い制服のポケットから出したのは、絶妙な私と天音さんの2ショット写真。

「私と彼の2ショット・・・・・・・・・・・・・・・・えへへへへへ」

年頃の少女としては余りにもだらしない表情で手の写真（賄賂）を見てはだらけきった笑みを浮かべる。

「・・・・・・・・ハッ！！もうこんな時間ですわ！早くシャワーを浴びて寝ないと・・・・・・・・・・あら？」

ふと窓を見たセシリアは、緑色の粒子が夜空を舞っているのに気がつく。

「なぜこれが宙を・・・・・・・・っ！？あ、アレは！」

窓から顔を出し、上を見上げたセシリアの目に映ったのは・・・、

「す、《ストライク》・・・・・・・・？何処へ・・・・。」

ストライクは天音が乗る機体だ。その機体がこんな真夜中に何処かへISで向かっている。かなりの速度だと見て分かる。既に目には

ゝ実習とパーティと深夜のお仕事ゝ（後書き）

感想・アドバイスお待ちしております。

く帰宅とセカンド幼馴染と訓練く（前書き）

今回登場するオリジナルIS

《打鉄 箒仕様機》

打鉄を組み立て、箒用にカスタマイズしたもの。箒の専用機が来るまでの埋め合わせ。

本来の機体配色を紅色にし、箒が剣道をしていたので近接戦闘向けにし、動きを阻害しないようにより装甲を薄く、それでいてより面積を多くした。

さらにスピードと加速力をつけるために脚部にスラスタを取り付ける。

これによって防御面を損なわずに機動性をあげることが出来ました。

武装

- ・ 刀型超振動近接ブレード「アマツチ」2本
アンロック・ユニット
- ・ 非固定浮遊部位75mm対空防御機関砲搭載シールド「キゲキ」2基
- ・ 背部に搭載された350mmガンランチャー「サミダレ」

あまり遠距離には対応していないが、機動性は上がっており操縦者の技量では第3世代のISとも互角に渡り合える。

箒の身体データを基に設計。本来の防御力を極力減らさず、なおかつ機動性をあげることに成功。

動力は大量に粒子を貯蔵したGNコンデンサー。

元々のブレードが1本に対してこちらは2本。切れ味を上げるため

にアーマーシュナイダーの技術を転用し、内臓された電池により本体からのエネルギーを必要としない。刀型を選んだのは筭が昔剣道を習っていたため。

非固定浮遊部位だった左右の盾にはイーゲルシュテルを2門搭載し、スピードを上げるためにスラストーもつけたため一回りほど大きくなったがそこまで変わってはいない。さらにON/OFF切り替え式のオート射撃なため本人が狙わずともよい。

そして唯一の遠距離武器は右手持ち式の350mmガンランチャー。遠距離よりむしろ中距離に対応している。普段は砲身を折りたたんで背部にマウントされているが、発射時は右脇で抱えるように持つ。バスターのほぼ同じ性能。

～帰宅とセカンド幼馴染と訓練～

S I D E セシリア

現在時刻、朝の4時。

現代の若者達からしてみれば、未だ夢の中であるこの時間にセシリアは起きていた。

（結局昨日は寝るのが遅くなってしまいましたわ……。それにこんなに朝早く起きてしまうなんて。……。目も覚めてしまいましたし軽くジョギングでもしてシャワーを浴びようかしら？）

昨夜の天音が《ストライク》でどこかへ向かうのを見てからどうにも胸のモヤモヤが収まらずに、悶々としていたら何時の間にか就寝時間を過ぎてしまい、慌てて寝たのだ。

「……………んっ！さて、そうと決まれば早速……………ってあれは？」

ベットから起き上がり窓のカーテンを開けたら、海の向こうから何かが近づいて居たのだ。

小さくて分かりにくいが、緑色の粒子が舞っているのが見える。

「天音さん?! いったいこんな時間まで何を・・・っ!」

急いで身支度を整え、部屋を飛び出し寮の外へ出る。出ると同時に天音が地上に降り立つのが見えた。

「あ、天音さんっ!!」

「ん? セシリアか・・・。こんな時間に何してるんだ?」

「それはこちらのセリフですわ!! 昨日の夜からこんな時間までどこへ行ってらっしゃったの?!」

「昨日の夜」というところで苦虫を潰した表情になった天音を見て、したことは分からないが『何か』をしていたことだけは分かったセシリアはどんどん近づき問いただす。

「その顔は何かしていましたわね?! さあ! 何をしていたのか話なさい!!」

「別になんだっていいだろう?」

「駄目ですわ!」

「はぁ・・・わかったよ。話せばいいんだろ? 話せば。」

「そ、そうですね! 素直に話さない!」

予想外に早く口を割りそうな天音について命令口調で話してしまうが、そんなに気にせず天音は続ける。

「実は……………」

「実は？」

「……毎週限定発売の特選チョコレートケーキを買いに並んでいた。」

「……………」

天音の予想を斜め上に行く発言に間の抜けた返事をするセシリア。しかし、パーティーであればお菓子や甘いものを食べた本人にとつてはとても重要なことらしく真面目な表情で話している。

「いや、昨日布仏に聞いたら紹介してくれたから行ってみたんだ。今から一緒に食うか？」

「え、え？で、ではいただきますわ……………」

そう言つて近くのベンチに腰かけ、白い箱からケーキを取り出す天音の隣に座り込む。そして、取り出したチョコレートケーキを口に放り込む。

「……もぐ……んぐ……ん……………」

「そ、そうなんですの？」

「ああ！これは限定品なのがあるよ。ほれ、セシリアも食べるよ。」
「え、ええ。いただきます・・・わ？」

そう言っただけで差し出されたケーキを見て止まってしまう。なぜなら・・・、さっき天音が食べ掛けのケーキを差し出しているからだ。（といっても、既に半分もないが。）

「ん、どうした？チョコケーキは嫌いかな？」
「い、いえ・・・。い、いただきますわ。（こ、これって間接キスではなくて？！し、しかもあゝんまでも？！）／＼／＼／＼／＼／」

あゝん＆間接キスのコンボで既に真っ赤だが、天音は当然気付かない。そして一口だけ口の中に入れる。

「（間接キス＆あゝん間接キス＆あゝん間接キス＆あゝん・・・。）
・・・私、もう死んでもかまいませんわ。／＼／」
「ホントに旨いよなこれ！」

セシリアの咳きは、ケーキに夢中の天音の耳には届かなかった。放心状態のセシリアを尻目にどんどんケーキを食べ、10個あったケーキ残り4つとなってしまった。

「残りはみんなにあげるか？うん、そうしよう。んでセシリア？何

時までニヤニヤしてるんだ？」

「ッ？！そ、そんな顔していませんわ！！／／／」

「そ、そうか？んじゃさ、俺昨日から並んでて睡眠不足なんだわ。おやすみ……。」

「へ？ちょ、天音さん？！／／／」

満足げな表情で天音は寝てしまった……。セシリアに倒れこむように。周囲から見れば抱きついているようにも見える。

「（抱きつかれてる抱きつかれてる抱きつかれてる抱きつかれてる抱きつかれてる……。あ、でも寝顔も可愛いすわね。）と、とりあえず運びませんと。／／／」

そう言って起き上がろうとし……。簡単に持ち上げられた。

「（か、軽すぎですわ！！いったい体重は何kgなんですの？！あんなに食べてるというのに！！……。でも体重のわりにはがっちりしてますし、それに匂いも……。）って、そんなことよりも！／／／／／」

女子の体重でも軽々と運べることに驚きつつもしつかりとした足取りで寮の中を進んで行く、ケーキの入った箱を忘れずに。やがて、天音達の部屋に着く。

「（５時半ですか・・・起きていらっしやるのかしら？）『コンコン』リエルさん、起きていらっしやいますかしら？セシリアですわ。」

『ん？少し待っててくれ。』

少し待つと、寝起きなのか少し乱れた髪のみまりエルが出てきた。

「天音さんがこのケーキを買いに帰ってきたところで鉢合わせしまして、それで食べた後寝てしまいましたので運んできましたわ。」

「んん、そうか。悪かったな運んできてもらってよ。」

「かまいませんわ、思いのほか軽かったので。では私はこれで。」

そう言つてリエルに天音を預け自室へ戻る。

（・・・・・・まだ彼の匂いが残ってますわ。ってそんなことはどうでもいいのです！／＼／＼／＼）

途中何度も天音の残った匂いを嗅いでは１人悶々としていたが。

「天音、少し気をつけようぜ？まだバレルには早すぎるからな。」
「わかってるさ、気をつけるよ。」

SIDE 天音

朝のHR前、一夏達と集まって噂の転校生について話していた。

「そっぴやもうすぐクラス代表戦だな。」

「そっぴや、2組のクラス代表が変更になったらしいな。しかも中国のからの転校生で代表候補生だ。」

「中国の代表候補生ですか・・・、私の存在を危ぶんでの転入かしら？」

「気にする程のことじゃないだろ？」

それよりも、なぜリエルがこんなに早く情報を握ったのか知りたい。

「女子の交友関係が広いからな。」

「さいですか・・・。」

思考を読むなといたい。

「でもよ、こんな時期に転校生って珍しくないか？」

「なんだ一夏、興味あるのか？」

「ああ、多少はな・・・。」

「そんな余裕はないがな。勉強と訓練と忙しいし。」

「そうだぞ一夏！お前に女を気にする時間はない！！」

事実、まだ実習訓練は行えてないが、それでも毎日の天音の授業と課題をやっているため余裕がない。

「でもでも、今のところ専用機を持ってるのって1組だけだから余裕」

「その情報古いよ！」

話を遮った人物は、教室の入り口で仁王立ちしていた。

「2組も専用機持ちが代表になったの。そう簡単には優勝なんて出れないから！」

「鈴・・・？お前、もしかして鈴か？！」

「そうよ！中国代表候補生、鳳 鈴音！今日は宣戦布告に来たって訳よ！！」

そう言い放ち一夏に向かって指をさす。クラス中から彼女についての話し声が聞こえる。

「鈴・・・、お前何カツコつけてんだ？すつげー似合わないぞ！」
「んなつ？！な、なんてことを言うのよアンタはー！！ッツ？
！いったく・・・、何すんのよ！つてげっ？！」

一夏に文句を言おうとしたのを邪魔された鈴は後ろを向くが、そこには織斑先生こと千冬さんが立っていた。

「もうSHRの時間だぞ。教室に戻れ。」

「ち、千冬さん・・・。」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ邪魔だ。」

「す、すいません・・・ふう。またあとで来るからね、逃げないでよ一夏！！ふんっ！」

そう言い残し教室を出て行く。

「一夏、知り合いか？」

「あ、ああ。しかしいつが代表候補生か。」

その顔は、懐かしい思い出に浸るような顔だった。しかし、その顔を見る筈の顔は不機嫌満載だったが。

所変わって食堂。いつものメンバーで向かっている途中で偶然鈴

と出会い、一夏が連れて来て今日は1人多くなっている。
天音はサンドイッチにデザートのカーキ、リエルは牛丼、セシリ
アは洋風ランチ、箒と一夏は焼き魚定食、鈴がラーメンを頼み席に
座る。

「で、いつ代表候補生になったんだよ？」

「あんたこそ、ニュースで見たわよ？ビックリしたじゃない！」

「俺だつてこんなトコに入るなんて思わなかったからな。」

「入試の時にIS動かしちゃったんだつて？なんでそんな事になっ
ちやつたのよ？」

「なんでつて言われてもな。」

2人隣同士に座り話し込んでるせいか、箒の不機嫌さが増していく。

「そつえばさ、一夏の他にもISを動かせる男。もしかしてその
2人？」

「ああ、2人とも自己紹介してくれないか？」

「オーライ、俺の名前はリエル・シュリーベル。よろしく！」

「名前は空川天音、よろしく。」

「ええ、よろしく。確かアンタのISつて篠ノ之博士が開発したん
だよな？」

「ああ。知り合いの伝手でな。」

「ふん……。」

一応外ではそうなるように頼んだのだが。そしてイライラの限界を
超えた箒はとうとう立ち上がる。

「一夏、そろそろ説明してほしいのだが!?!?!?!ま、まさか一夏?こいつとつ、つき・付き合っているのではなからうな!?!」
「べ、べべ、べ別に私は?!」

鈴音の方が狼狽した、しかも過剰に。これはもうあれだな、落とされてるな。当の一夏は笑ってるが。

「落ち着けて箒、鈴は只の幼馴染だって。」
「……むう。」

今度は鈴音の機嫌が悪くなった。流石キングオブ唐変木、今の一言で恋する乙女(笑)を傷つけたことにまったく気付いてない。

「幼馴染……?」
「あゝ、そっぴや教えてなかったな。鈴、こいつが篠ノ之 箒、前に話しただろ? 箒はファースト幼馴染で、お前はセカンド幼馴染ってとこだな。」

箒は小4で引越してしまったが、その後に鈴が来たらしい。いわゆる入れ違いってやつか。

「ファースト……。」
「ふゝん、そうなんだ……。初めまして篠ノ之さん、これからよろしくね?」

「ああ・・・こちらこそよろしくな鳳？」

互いに笑っているが、その間にはバチバチと見えない火花が散っている。

「一夏、何ならアタシが見てあげよつか？ISの操縦！」

「え、いや。俺は筈と一緒に天音とリエルに見てもらっただけど・・・？」

「へ？」

確かに頼まれてたな。すると鈴が慌てたように一夏に詰め寄った。

「い、一夏？！こんな男に私が負けると思ってたの？！」

「いや、そうじゃねえよ鈴。けど、天音の試合を見て、リエルと戦って2人の強さがなくなっただけで分かったんだ。だから俺は2人に教わりたい。」

「・・・・・・・・・・。」

一夏のいつになく真剣な表情に黙り込んでしまう鈴。

「・・・それは、一夏自身が決めたことなの？」

「ああ。」

迷いもなく肯定する一夏を見つめる鈴。そして少し経つと息を吐き席を立つ。

「なら仕方ないわ。でも、後で後悔しても知らないわよ？」
「しないさ、自分で選んだんだからな。」

一夏の返事を聞かないまま立ち去っていく鈴の姿を、一夏は彼女が食堂を出るまで見ていた。

「・・・いいのかよ一夏。彼女の誘いを断つても？」
「あゝ・・・。確かに鈴には悪いと思ってる。けど俺は、天音とリエルに教えてもらいたいんだ。」
「・・・。」

リエルも一夏の真剣さに黙り込む。

「改めて頼む。・・・俺を鍛えてくれ！」
「・・・ああ、いいぜ一夏！今日からビシバシいくからな。」
「メニューも出来上がったし。」
「ッーさ、サンキューー！」

もとよりそのつもりだったがな。だが、自分からとでないのではやはり育ち方が違ってくる。

「んじゃ、今日の放課後第3アリーナ集合な。」

「おう！」

「んじゃ、そろそろ時間もないし戻ろうぜ？」

キンコンカンコン……

会話を切り上げ、食堂を出たと同時にチャイムが鳴り、教室へ向かって全速力でダッシュしたが授業に間に合わず出席簿の角が落ちたのは割愛しておく。

時は過ぎて放課後の第3アリーナ。

既に天音にリエル、一夏に箒にセシリアと全員が集まっている。そこには千冬も居るが。だが、千冬さんが居る原因は簡単だ。

『箒の専用機がないのに貸し出して来ない。』

その理由に興味を持ったんだろう。

「それで空川、篠ノ之のISはどうするつもりだ？」

「ああ、それなら既に用意してありますよ………リエル。」

「オーライ。んじゃ早速お披露目の時間だ！」

「結婚式じゃねーよ。」

そんな天音の突っ込みに誰も反応しない。いや、出来ない。それは

目の前に現れた真紅のISに全員が言葉を失っている。

訓練用IS、打鉄。^{うちがね}だが、目の前の打鉄は本来黒色なのに対して紅色。特徴的な武者鎧はよりスマートに改良されている。

「打鉄を組み立て、箒用にカスタマイズしたものです。本来の機体配色を紅色にし、近接戦闘で動きを阻害しないようにより装甲をシンプルに、それでいてより強度を上げることが出来ました。さらにスピードと加速力をつけるために脚部にスラスタを取り付けました。これによって防御面を損なわずに機動性をあげることが出来ました。武装は刀型超振動近接ブレード「アマツチ」2本、非固定浮遊部位^{ユニット}の75m対空防御機関砲搭載シールド「キゲキ」を左右に2基、背部に搭載された350mmガンランチャー「サミダレ」。

遠距離には対応してませんが、機動性は上げてますし操縦者の技量では第3世代のISとも互角に渡り合えるはずです。」

「……………」

一応打鉄の設計図は手に入れていたため開発は容易だった。そこに箒の専用機が来るまでの繋ぎとして作ったのがこの《打鉄 箒仕様機》だ。

箒の身体データを基に設計。本来の防御力を極力減らさず、なおかつ機動性をあげるのには苦労した。

元々のブレードが1本に対してこちらは2本。切れ味を上げるためにアーマーシュナイダーの技術を転用し、内蔵された電池により本体からのエネルギーを必要としない。刀型を選んだのは箒が昔剣道を習っていたため使いやすかったからだ。

非固定浮遊部位だった左右の盾にはイーゲルシュテルを2門搭載し、スピードを上げるためにスラスタもつけたため一回りほど大きくなったがそこまで変わってはいない。さらにON/OFF切り替え式のオート射撃なため本人が狙わずともよい。

そして唯一の遠距離武器は右手持ち式の350mmガンランチャー。遠距離とよりも中距離や面での制圧に使う。普段は砲身を折りたたんで背部にマウントされているが、発射時は右脇で抱えるように持つ。バスターのとはほぼ同じ物。

この3つが主な武装だ。まだ箒の正式な専用機の装備がわからないため勝手に武装を選んだが。

「空川、1つ聞きたい……。コアはどうした？」

「コアですか？そんなものないですよ？」

「何だと?!」

「当然じゃないですか。コアはあの篠ノ之博士が造ってるんですよ？流石に自分はコアを開発できるほど万能ではありませんよ。」

「では何だ、まさか動かない唯の鉄の塊か？」

「いえ、ちゃんと展開しますよ？箒、一回展開してみてください。」

「あ、ああ……。分かった。」

打鉄改を見て戸惑いを隠せない箒は、少しずつ打鉄改に近づき、そして手に触れる。

瞬間打鉄の装甲が発光、光が消えた時には箒は打鉄改を展開していた。

「う、これは？！す、すごい！」

「馬鹿な……！ コアはないのだろう空川？！」

「そのことなんです……（実はストライクやバスターの動力と同じなんです）。」

「何？どゆゆゆとだ？」

「まあ正確には粒子なんですがね。動力炉から発生する粒子を大量に貯蔵したのがあの打鉄です。なのでほぼISと変わらない性能を発揮できるんです。」わかりましたか？」

「成る程な。では私は戻る、くれぐれもやらかすなよ。」

「分かってますよ千冬さん。」

因みにこの話は小声で行われていたため、一夏達には聞こえなかった。

「んじゃ、箒も展開したことだし俺達もさっさと展開するぞ?」

「へ？あ、ああ。わかつたぜ。」

「わ、わかりましたわ。」

そう言うてリエル達も展開する。

[illegible]

「どうかしたかじゃねーよ！！なんでよりもよって2人？！明らかに俺死ぬだろ！！」

「いやいや、これも訓練のひとつさ。これにより反射神経と状況判

断力、及び動体視力を鍛えてもらつ。それにこれをこなさないと次には行けないぞ?」

「そ、そんな馬鹿なあああああああ!?!」

「ちなみにセシリアはビットの射撃だけにしてくれ。」

「わかりましたわ!」

叫んだ一夏を引きずり空へ上がる。哀れ、一夏。

「あ、天音。私は何をすればいいのだ?」

「ああ、まずは武装の説明からだな。それが終わったら実戦で使用しよう。その後から少しずつ回避機動や射撃を入れていこう。」

「しゃ、射撃はあまり得意ではないのだが……。」

「いいのさ。もともとこれは専用機じゃないし、無理して覚える必要もない。取り付けたのもせいぜい牽制に使えるかな。って軽い気持ちさ。それに、箒には剣道で学んだ技術もある。ならそっちに磨きをかけたほうがいいだろ?」

「そ、そうなのか?」

「確かに苦手を克服することはいいことさ。だけど無理して苦手を直そうとして他を疎かにするなら必要最低限のことだけ覚えさせるさ。んじゃまずは……。」

《ただいま箒に説明中》

「ってな感じだ。覚えられたか?」

「か、かるうじて……。」

長々と説明してしまった。時間にして30分つてどこか？

「んじゃ早速実戦だ、武器を展開してみろ箒。」
「わ、わかった。」

そう言ってアマツチを両手に構える。対して俺もストライクを展開し、アーマーシュナイダーを握る。

「んじゃ模擬戦開始といくぞ？」
「ああ、こい！」

それが合図となり箒へ突貫する。

右手のナイフで斬りかかるが、体を左に捻って避けられる。さらにそのまま回転して左手に持ったブレードで斬りかかってきたのをナイフで逸らし、次いで迫ってきたブレードを後ろに飛ぶように避ける。

「流石は剣道をやっていただけはあるな。近接戦闘の技術はずば抜けている。」

「当然だ。子供のころから一夏と共にやってきたからな！」
「成る程。だけどそれだけでどうにかなるかな？」

すると、ランチャーストライカーに換装される。先程までの青い装甲は緑色に変化し、右肩部には120mm対艦バルカン砲と350mmガンランチャーを搭載した複合兵装ユニットが換装されている。

「な、なんだその馬鹿デカイ砲身は?!それに色が変わったけど・・・?!」

「んじゃ、早速いくぞ?」
「ツツ!!」

そう言い放ち、腰に構えたアグニから出力を最低にした熱線を放つ。それに対して筈は回避が間に合わず装甲を少し溶かされる。

「な、なんて威力だ?!」
「しゃべる暇なんてあたえないぜ?」

さらにバルカン砲とガンランチャーも使い一気に攻める。その時キゲキをONにしたのかバルカンがミサイルを迎撃し、こちらに近づいてこようとするがアグニの熱線を避ける為になかなか近づけない。

「くっ!距離さえ詰められれば・・・ツ!」
「詰めさせねえよ!」

さらに砲撃の手を強める。断続的に放たれるミサイルを迎撃するが、アグニが右肩のキゲキを貫く。それにより一気に迎撃が追いつかず

被弾していく。近づこうにも先程よりも勢いの増したミサイルの量とバルカン砲にアグニの強力な熱線に近づけない。

いつしかシールドエネルギーも84と僅かだ。

「（まだだ！まだ私には使っていないものがある！）いっけえええー！！！」

「チツ！やはりそう来たか・・・！」

箒がとった手段は簡単だ。背部のガンランチャーを右手に持ちミサイルを迎撃し、残ったキゲキを盾に突貫してきた。アグニを撃とうか考えたが、銃口に弾を打ち込まれればこっちの銃が破壊される危険がある。さらにはアグニを失えば火力が大幅に下がってしまうため迂闊に撃てない。

（駄目だ、ミサイルは迎撃されるし・・・。かといってバルカン砲じゃキゲキを落とせない。換装すりゃいいが・・・、この距離じゃ危険だな。って既に距離を詰められていた?!）

ガンランチャーを戻し、両手にブレードを持った箒が斬りかかってくる。その斬撃を『あえて』発射寸前のアグニで受け止めようとして切り裂かれる。

「もらったああアツ?!」

そして爆発で一瞬視界が消えた筈を衝撃が襲い掛かり吹き飛ばす。
シールドエネルギーは0となっていた。

そして煙が晴れ、ストライクを見れば右肩のユニットがなかった。

「危ない危ない、咄嗟にアグニを斬らせて爆発視界を潰し、ミサイルを残したユニットを至近距離で爆発させなきゃ流石に危なかった。」

そう、発射寸前のアグニはエネルギーを放てずそのまま爆発しそれで目を眩ませて、右肩のユニットをパージ。そして筈が見えると同時に空中のユニットにナイフを投げつけ爆発させ、その爆発でエネルギーを削ったのだ。

「まさか咄嗟にあんなことされるとはな・・・。」

「苦し紛れの策さ。っと、あっちも終わったらしいな。」

「・・・・・・あれは一夏か？」

見えたのは顔面蒼白で魂が抜けかけている一夏とそれを背負っているリエル、そしてこっちへ駆けてくるセシリアだ。

「天音さーん、どうでしたか？私の華麗なる射撃！」

「ん？いや、筈の試合に夢中で見てなかった。」

「え、ええー？！」

「どっちが勝ったんだ天音？」
「ん。」

自分と意を込めて首を縦に振る。

「まあ初搭乗であそこまで出来れば上出来さ。現にランチャーストライカーはやられたし。」

「近接用の打鉄にランチャーで挑むなよ。」

「いいだろ？それにあえて不利な状況にさせたんだしな。」

近接に近接っていうのもつまないからあえてソードじゃなくランチャーにしたんだがな。

「んで、一夏は？」

「ああ、お前らが試合を開始して10分くらいで動きが鈍ってきてな。」

「最後はリエルさんの連結させたガンランチャーとレール砲の連射で終わりでしたわ。」

「…………お前はやることがエグイな。」

「たまには使ってもいいだろう。それにセシリアもビットの射撃もあつたじゃねえか。」

連結させたガンランチャーと腰のレール砲の連射、さらにビットも加わったらいくら一次移行したからって無理だろ。

「でもノルマはいつたる？」

「ああ、ちゃんと達成したな。」

「？天音さん、ノルマってなんですか？」

「ん？ああ、そのままさ。一夏は最低30分持ちこたえる。セシリアには射撃の命中率70%以上にビットの維持30分以上。箒はまづ機動と武装の展開だが問題なしだ。」

ちゃんと今回の訓練はデータにとってパソコンに記録してある。後で整理し今後のメニュー変更等に使うからだ。

「んじゃ今日の訓練は終わり、寮に戻るぞリエル。おつかれ……」

「」

「オーライ、おつかれさん。」

「お、おつかれ……。」「

「おつかれさまですわ。」

「ああ、おつかれ。」

こうして初めての訓練は終わった。

く帰宅とセカンド幼馴染と訓練く（後書き）

いつの間にか筭と戦闘するはめに・・・。

誤字脱字あればお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6607u/>

IS(インフィニット・ストラトス)～願いと誓い～

2011年10月9日10時24分発行